
不透明な囁き

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不透明な囁き

【Nコード】

N2021E

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

友人の美加に呼び出された史美菜と百夏は、彼女の胡散臭い遊びに付き合った。農家の古い蔵の奥で見つけた魔法事典。それは胡散臭く、軽薄で陳腐な一冊の書籍だった。女子高生の三人はその本に描かれた呪文を執行する。全てはそれが始まりだった。ちよっと切ない、魔術にまつわる物語。

1・気の抜けた返事（前書き）

この話は、ごく普通の高校生が日常で体験する些細な魔法の話です。現代ファンタジーなので、異世界やモンスターなどは出てきません。

1・気の抜けた返事

満開だった桜は春の大雨に叩かれて、見事に散り落ちていた。花を失った枝は、青葉を茂らせて別の風景を映し出す。

小さな水路沿いに連なる桜並木の横を通って、小さな橋を渡る。

何も植えられていない、けれども息吹の予兆を感じさせる畑を両側に眺めながら舗装されてない道を自転車に進んだ。

史美菜フミナは高校の友人である斉野美加に呼ばれて、彼女の家に来ていた。

行動的で、何かにつけて突拍子もない事を思いつく美加に呼ばれると、史美菜は何だかワクワクしながらも、ちよっぴり裏腹に気が重い。

「これから魔法をやるわよ！」

美加は眼を輝かせて徐に言った。

美加の家は昔ながらの専業農家で、敷地には畑とビニールハウスが在る。

大きな引き戸の玄関前で史美菜がチャイムを鳴らした時、もう一人の友人、平井百夏ひらいももかは既に家の中にいた。

早々に三人は家屋の隣に在る大きな蔵に向う。

茶色の土壁で覆われた、黒い瓦屋根の蔵は家一軒分の大きさが在る。外壁の土壁は古びて風化し、あちこちが小さく崩れたりひび割れたりしていた。

蔵の中は薄暗くて、麻袋や大きな樽が積まれていた。

隅の方には使われていない耕運機が、黒々と影を浮かび上げさせてる。

史美菜と百夏は初めてそこへ入った。

二人共美加の家には何度も来ているが、蔵に入るのは初めてだった。

た。

美加が柱に設置されたスイッチに手を伸ばすと、高い天井に吊るされた三個の裸電球に明かりが灯る。

史美菜はポカンとそれを見上げた。

「こつちだよ」

美加は古びた梯子を上り始めた。

蔵の中の半分は二階建てになって、もう半分は吹き抜けのまま。大きな木製の梯子がかけてあり、美加はそれを登っている。

彼女は上階に差し掛かる手前で再び振り返ると

「早くおいでよ」

片手で手招きした。

史美菜と百夏はそれを見上げていたが、美加に手招きされるままどちらともなく梯子に手をかける。

「あ、フミ、先いきなよ」

「モモちゃん行きなよ」

「あたし、スカートだから最後でいい」

史美菜は百夏の言葉で先に梯子を上り出すが

「そんなの、女同士じゃん」

二人はロフト？ に登ると、キョロキョロと辺りを見渡した。

天井は人が立ち上がっても余るほどに、充分な高さがあるが、ホコリっぽくて薄暗い。

「クシュン」と、百夏が小さなくしゃみをする。

大きな太い梁には太いロープが撒きついている。汚れた木箱が床に積み上げられて、その奥から美加の声がした。

「こつちこつち」

木箱の陰から、再び美加は手招きする。

史美菜と百夏は再び顔を見合わせてから、積み上げられた木箱の隙間を抜けた。

奥は開けて、壁には古びた本棚が並んでいる。

そこには、茶色く黒々としたいかにも古い書籍がズラリと並んで

いた。

美加が一冊のぶ厚い本を掴んで言った言葉が

「これから魔法をやるわよ！」

史美菜も百夏も意味が判らずに、半分口を開けたまま美加を見つめ、同時に彼女の手元へ視線は移った。

床に魔法陣を描いた。

美加の言う魔法事典に描いてあったのを、そのまま真似して描くわけの分からない記号を、意味も解らずに三人はひたすら書き写した。

「ねえ、魔法陣って小麦粉で描くもんなの？」

史美菜が言った。

鼻の頭に、小麦粉が着いて白くなっている。

「いいんじゃないの？」

美加のいい加減な答が返る。

彼女は何時もそうだ。

何処かいい加減で、おざなりだ。そのくせやる気だけは満々にある。

現に、彼女が最初に描いた一番外側の円は何だか歪んでいて、百夏がロープをコンパス代わりにして描こうと言いださなかったら、そのままひしゃげた魔法陣を描かされるところだった。

「塩の方がよかったんじゃない？」

百夏が言った。

「なんで？」

「だって、お塩ってお清めとかにも使うじゃん」

「ああ、そうか……」

9割がた描き終えた直径3メートルほどの魔法陣をかき消そうとする美加を、史美菜と百夏は慌てて止めた。

「で？ なんの魔法をやるの？」

直径3メートルほどの大きな魔法陣が描き終えると、質問したのはやっぱり史美菜。

史美菜は何時も、奇抜な発想をする美加に冷静さとリアルな現実を突きつける役目がある。

「魔法を使うって言ったら決まってるじゃん」

美加はぶ厚い魔法事典などと言いついかにも胡散臭い物を両手で持ち上げると、ブンブンと振り回す。

「魔法って言ったら、恋でしょ」

「決まってるの？」

百夏が言った。肩につく黒髪が揺れる。

「だって、漫画とか映画とかって、そうじゃん」

「まさか、あんた」

史美菜が声を上げる。

「その、マ・サ・カ」

美加は憧れの先輩をどうにかモノにしたがっていた。

モノにしたいと言うのは、いわゆるヤツちやいたっていうヤツだ。

彼の姿を見る度に、彼女ご自慢の細身の身体が疼くらしい。

とんだエロ女だ。

しかし、こんな小麦粉で描いた出来損ないの魔法陣で、魔法なんてかけられるのか？

二重の円の内側に三角形を二つ逆向きに重ねた図形を描いた。二重に描いた円のその間は12等分に分けられて個別の文字を描いた。何かで、いや何処かで誰もが見覚え在る魔法陣だった。

こんなベタな図形で……？

百夏もそうだが、史美菜もそんな事は信じていなかった。

美加の冗談に、というか遊びに付き合っていただけだ。

美加の鼓動は、何時だって退屈しのぎの暇つぶしにはもってこい

なのだ。

21世紀の現代で、魔法なんて存在するはずはない。いや、16世紀だろうが、ローマ時代だろうがそんなモノがあったまるか。

史美菜はわざとらしく肩をすくめると、小さく溜息をついた。それを見た百夏は、声を出して笑う。

「ほらほら、笑ってないでいくよ」

美加が魔法事典を広げて二人に差し出す。

「魔法って言っても、何するの？」

「この魔法陣を三人で囲んで呪文を唱えるの。その後で、あたしが心中で願いを唱える。魔法陣の上端に立った者が願いを叶えられるのよ」

「へえ」と、気の抜けた返事が、二つ重なった。

2・呪文

ティファレント・ベイバーロン・アイオンロゴス・イオド・ヌイト

……

「ち、ちょっとタイム。これ長くない？ ていうか覚えらんないよ」
魔法陣を囲むと三人の位置はバラバラに離れるので、全員が魔法
事典を見る事はできない。

「もう、そんな事だからフミは暗記物がダメなんだよ」
「っさいわね。とにかく、紙とペン貸して」

史美菜に言われて、美加は渋々本棚の横の戸棚をガラガラと漁る。
何処から引き上げた戸棚なのか、それともここで何かの事務仕事
をしていたのか、美加が音を立てる度に、定規や電卓が床に転がり
落ちて小さなホコリが舞う。

彼女はメモ用紙とボールペンを見つけてくると、史美菜と百夏に
渡した。

史美菜は、渡されたメモ用紙の端に積もったホコリを、フツと息
ではらう。

「あ、あたしは覚えたよ」
百夏が言った。

「マジで？」

実は美加も、空でいえるほど暗記してはいない。

史美菜がメモ用紙に呪文を書き終えると、再び儀式の再開だ。

ティファレント・ベイバーロン・アイオンロゴス……

「ねえ、コレってどういう意味なの？」

再び史美菜が中断させる。

「ちよっと、フミ。いい加減にしてよ」

「だって、なんだか妙に言い難いし、何だか笑っちゃうよ。何語なの？ てカンジ」

「確かに笑っちゃう……」

百夏がそう言いながら、既に笑っていた。

史美菜もつられて、ついに笑い出す。

「もう、何よ二人共つ。魔法語に決まってるでしょ」

史美菜と百夏の笑い声は、さらに大きくなった。

「魔法語？ そんなのアリ？」

「だって、魔法の事典なんだから魔法語でしょ」

美加だけは、自分の願いを叶える為に大真面目だ。

しかし、他の二人の笑は止まらない。

「ちよつと、なんで笑うのよ」

「だって、なによ、アイオンゴロスってさ。意味わかんないし」

そう言われると、何だか美加もおかしくなってしまう。

三人は少しの間、顔を見合わせて笑い合った。

「ていうか、史美菜。あんた鼻の頭に小麦粉着いてんよ」

美加がパチンツと両手を叩いて「ウケル」

「えっ、ウソ！ もう、早く言つてよ」

再び三人は笑った。

「さ、もういいでしょ。本番行くよ」

美加が場を締めると、笑いに満足した史美菜と百夏も彼女に付き合つて真顔に変わった。

ティファレント・ベイバーロン・アイオンロゴス・イオド・ヌイト・ハデイト・ティファレント

呪文の後、三人は目を閉じて沈黙した。

……別に何も起こらなかった。

イナズマが落ちて魔法陣が光ったり、輝く魔法陣から竜巻が起きたりなんてしない。

当たり前だ。

三人は次々にゆっくりと目を開ける。

ほの暗い平穏な蔵の中は相変わらずホコリっぽい臭いで、天井からぶら下がる裸電球が三人を照らしていた。

「何も起こらないじゃん」

そんな事は百も承知だが、史美菜はとりあえず声に出して言うてみる。

美加は腰に手を当てると、フツと小さく笑う

「起きてるわ」

自信に満ちた眼光で、二人を交互に見つめた。

「何が起きたの？」

百夏が眼を丸くして、ハトのように美加を見返す。

「ほら、見て」

美加が正面を指差す。

蔵の高い天井に続く壁に作られた小さな天窓は、ロフト？ の位置からは正面に位置していた。それが開いている。

積み上がった木箱の隙間から、それは確かに見えた。

「あの窓は、確か閉まっていたはずよ」

「そ、そうだった？」

「閉まっていたわよ。今の魔法の呪文で開いたのよ」

「何で？」

「そんなのあたしが知るわけないでしょ」

美加は自身に満ちた口調で続ける。

「でもきつと、あの窓から魔法の効力が外へ飛び出したのよ」

「あの窓、閉まっていたっけ？」

史美菜は百夏を見る。

「さあ……」百夏は首を傾げるだけだった。

「ていうかさ、その本って、魔法事典なんだよね」

「うん」美加が頷く。非情に素直な頷きだ。

「じゃあ、なんで日本語で書かれてんの？」

「そ、そんなの……誰かが翻訳したんでしょ」

「魔法語を翻訳できる人って？ 誰よ」

史美菜はさらに突っ込む。

さすがに美加もおかしな事だと思ったのか、布で出来た事典の力バーを改めて見る。

表紙に書かれている文字は全て、彼女が言う所の魔法語なので、何が書いてあるかはまったく読めない。

したがって、著者も不明だ……

「きつとアレよ、大昔の偉い人が独学で解読したんだよ」

史美菜と百夏は再び顔を見合わせると、一緒に肩をすくめた。

こんな事はよくある事で、美加の突発的な行動の矛盾を追及しても埒が明かない事は、二人共よく知っていた。

2・呪文（後書き）

明日も深夜更新いたします。

3・平穏な日々

中津川史美菜。なかつがわふみな 彼女は昔から自分の名前に大いなる不満があった。苗字も名前も文字が多すぎる。

漢字で書いても全部で6文字。

だいたい史美菜だって文菜いいじゃない……

友達は今からみんなフミと呼ぶ。

美加に限っては、高校に入って初めて話しをした時

「なかつがわふみな？ 長っ。面倒だからフミでいいよね」

とイキナリ省略された。

百夏は中学からの友達で、気付いた時にはフミと呼んでいた。し

かも、高校に入ってクラスで自己紹介をした時

「あれ？ フミって史美菜？」

などと、とぼけた事を言った。

どうやら何時の間にか中津川フミだと、本気で思っていたらしい

……

史美菜たちが通う学校は海沿いの工業地帯と低い山に囲まれた自然の豊かな町だ。

別名、田舎とも言う。

電車は単線だが、大通りには大きなショッピングセンターもあるし、都内にも在る安売り電気店もちゃんと存在する。

特に生活には困らないし、女子高生も元気だ。

市内とその近郊には女子高が2つ、男子校が2つ、男女共学が5つ存在する。

数年前まで共学高は3校だったが、少子化対策として合併した高校があるのだ。

ただ、史美菜の通う南原女子高校は、近年制服デザインを見直した周囲の学校に比べ、そのセンスは少し遅れている。

濃紺のボックスプリーツのスカートは中学生のものと一緒だし、

上着はブレザーといっても丈もシルエツトもタイトでジャケットのイメージはない。

他の学校のように、ネクタイやリボンがないのはラクでいい。昔は紺色の細身のリボンを着けていたらしいが、いつの間になくなったそうだ。

スカートと共に上着の丈を自分で詰めたり、ブレザーにブラウスの衿を重ねるのが南原女子高での流行で、それがせめてもの反抗でもあるが、リボンもネクタイもない地味な制服は、生徒たち以上に他校の男子に不評らしい。

怪しげな魔法陣遊びから一週間が経っていた。

史美菜も百夏も何事もなかったように日々を過ごしている。

彼女たちにしてみたら、カラオケに行ったりシヨツピングモールをぶらついたりする行為となんら変わりはないので、後にその話題が尾を引きもしない。

史美菜は少し幼稚な遊びだとも思いつつも、幼い頃の甘ったるいママゴト遊びの中で雑草の汁を調合して毒薬と称した事や、電車の線路をひたすら歩いた淡く危険な香りなどを微かに思い出していた。史美菜と美加と百夏。確かに仲はいいしけっこう一緒に遊ぶが、何時でも一緒と言うわけではなかった。

時間と暇が合えば一緒にいるし、そうでなければ学校帰りだって別々だ。一緒に帰ろうにも三人とも帰る方向が微妙にズレている事もある。

百夏は普段、肩につく黒髪を後ろで結んでいる。少しふっくらして見えるがデブではない。胸とお尻が大きいのだ。

特に胸は小ぶりなブレザーがはち切れんばかりに張り出している。母方の爺さんがブルガリアの血筋のハーフだったらしいが、その為か瞳が僅かに緑がかって、光を受けるとグレーのようなグリーンのような、アヤシイ色に虹彩が光る。

高校へ入学したばかりの頃、よく教師にカラコンを入れていると間違われて呼び止められたし、ちよつと怖い先輩連中にも屋上へ呼び出されていた。

先輩が呼び出していたのは瞳の色だけのせいでもなく、彼女は隣に在る男子校から人気があつたのだ。

彼女たちが通う女子高のすぐ隣には、男子校が在る。普通科と商業科があるのだが、何故か百夏は商業科の生徒に人気があつた。

つまり、イマイチ男子受けしない事に納得のいかないケバイ先輩連中のやつかみなのだろう。

心配しても何も出来ない史美菜はよく

「どうだった？ 大丈夫？」

なんて声をかけたが、本人はいたって平気そうで

「別に」

と、ちよつと惚けた声をだす。

別に暴力をふるつてくるわけではなく、ただの威嚇らしい。

マイペースでどこかのんびり屋の彼女には通用しないのだ。

そもそも、百夏自身にはなんの非もない。

去年二年に上がつてからはそんな事はなくなつたが、早朝やあるいは授業中の間に仕切りのフェンスを乗り越えて百夏の靴箱に手紙を置きに来る商業科の無謀な連中は後を絶たない。

今朝もフェンス越しに二人の生徒が立たされている姿があつた。

フェンスを乗り越える生徒はなにも百夏目当てだけではなく、隣の女子高にアタックする無謀な連中は四六時中存在して、教員に見つかつてはああしてフェンス越しに立たされる。

生徒を立たせる行為は昨今懸念されているようだが、隣に在る興南高校にいたつては健在らしい。

市内やその周辺の男子生徒には制服が不評のはずなのだが、こうして奇妙な交流がある隣の興南高校は少し別格なのかもしれない。

美加は細身で手足が針金のような。腰骨が小さい為、どんなスリムパンツもすんなり履けてしまう。

白い肌は何処か虚ろで、スカートから覗く美脚が彼女の自慢らしい。

マロンブラウンに髪を染めたのは二年の3学期だが、白い肌に妙にシックリくる。

一年の頃はうるさく熱心に指導する教員も、その頃になると何故か規律に対するハードルを落としてくるので、こげ茶色の髪の毛くらいでは何もいわれない。

もちろん、去年の夏休み明けに目の覚めるような金髪で始業式に臨んだ隣のクラスの良江と真里は、一日中指導室で反省文を書かされたようだが……

美加は病的に白いが、病気ではない。特に貧血症でもないし、何時でも元気一番だ。

どちらかと言うと百夏の方が貧血で倒れたり、酷い生理痛で保健室のベッドを占領する事が多いのは史美菜にとって些細な謎でもある。

美加は行動的というか、無謀だ。

「山なんてつままないじゃん。新しくなった海浜公園行こうよ」

去年の遠足の前日に彼女は言った。

史美菜と百夏は美加に唆^{そそのか}されるように、彼女に付き合って遠足をサボる。

それなりに楽しかった。

春の陽光に煌く波と戯れるのも、砂浜に腰をおろして他愛無い話で盛り上がりながらコンビ二のおにぎりを齧るのも楽しかった。

やっぱり山より海がイイと思った。

しかし、翌日職員室へ呼ばれ、三人とも居残りで十枚のレーポトと反省文を書かされた。

それでも憎めないのは彼女のキャラなのだろう。

とにかく……一週間の平穏な日々が過ぎる。

青葉の木々を揺らす風が日に日に暖かくなって、河口才から微かな
汐の香りを運んできた。

3・平穏な日々（後書き）

5話まで、毎晩更新いたします。
その後は……

4・密かな苦悩

月曜日、何処となくみんな憂鬱な顔を隠すかのように笑い合ったりする。

そうやって憂鬱を吹き飛ばさなければ、月曜の朝を乗り切れない事は、自分たちがよく知っている。

その中でひと際輝く場違いなほどの笑顔で、史美菜に駆け寄る姿があった。

史美菜の家から学校までは自転車で十五分。

住宅街を抜けて大通りに出て広い歩道を少し行くと国道にぶつかる。その国道を左からやってくるのが美加で時折通学中に出会うが、遅刻ぎりぎりが多い彼女と会うのはいたって稀な事だ。

この朝は自転車をこぐスピードが全く違っていた。

美加は信号待ちをする史美菜に追突する勢いで迫って来たかと思うと、キッとブレーキをかける。

彼女と史美菜の自転車の前タイヤがコツンとぶつかる。

「危ないなあ。もう」

そんな言葉を美加は聞いていないのか

「ねえねえ、聞いてよ」

徐に自分の話を切り出す。

「何よ」

史美菜はそう言いながら、青になった横断歩道を渡りだす。

美加も慌てて走り出して、史美菜の自転車に並ぶ。

「昨日、しちゃったよ」

彼女は史美菜に顔だけを寄せて、出来るだけ小声で言った。

「したって、何を？」

「したって、言ったらアレじゃん」

史美菜は一瞬視線を空に向けると、美加を凝視した。

「誰と？」

「そんなの決まってるじゃん。城之内先輩だよ」

「うそ！」

城之内剛彦は、隣に在る興南高校のひとつ年上の先輩で、市の外れにある大学へ今年から通っている。

美加は去年から城之内にアタックしたがっていたが、機会がないまま卒業に至ってしまったのだ。

城之内剛彦はサッカー部のキャプテンを勤め、すらりとした長身と長髪に甘いマスクで、興南高校では一番人気だった。

放課後の部活が始まると、必ず数人がフェンスに張り付いていたもので、彼が去った今ではそんな光景はみられない。

もちろん、南原女子高のテニス部の練習を覗こうとする連中が、向こう側のフェンスに張り付く光景は相変わらずなのだが……

美加はフンと鼻を鳴らして笑うと

「だから言っただじゃん。あの魔法陣は効くんだよ。いや、あの魔法事典が効くのかな」

そう。一週間前の土曜日に行った魔法ごっこ。あの時美加が願ったのは間違いなく城之内と関係を持つ事だった。

それが一週間で叶えられた。

8ヶ月かかって何の進展もなかった事が、魔法の呪文ひとつで一週間。

そんな事があるだろうか。

そんなバカな……

史美菜はそれから学校へ着くまで喋り続ける美加にナマ返事で相槌を打ちながら、ずっとそんな事を考えていた。

開け放たれた教室の窓から、春の陽差と緩やかで淡い風が注ぐ。セックスやりたて……

史美菜の頭の中には、一日中そんなワードがぐるぐると廻っていた。

美加は昨日、城之内先輩とセックスした。

美加のシャープに切れた目尻と長く通った鼻筋。

眉を潜め、官能にもだえる彼女の表情は、きっと綺麗なのだろう。でも……ヤツた翌日に誰かに言うなんてありえない。

もつと時間が経って、例えば次の生理が来た頃に話すべきだ。そんな勝手な思いが史美菜の頭を駆け巡る事を止めない。

「ねえ、聞いた？」

昼休み、百夏が史美菜の前に立って、机に手を着いた。

史美菜は視線だけを上げて、彼女を見上げる。

「聞いた。城之内先輩でしょ？」

「凄くない？」

もちろん、魔法陣の効果を言っているのだ。

「偶然でしょ。それか、美加自身が暗示にかかって、超積極的になったとか」

今日はやたらと気温が高い一日だ。

史美菜は窓から注ぐ風では物足りず、ノートを掴んでパタパタと自分を仰ぐ。

「でもさ、彼の方から電話してきたって」

「うそ」

「だって、美加は先輩の携帯知らなかったって」

今朝、史美菜も美加の口から聞いたのだが、適当に相づちを打って聞き流していたから、全然それを聞いていなかった。

「そうなんだ……」

「ねえ、今度あたしのをやってくれるって。フミも協力してくれるでしょ？」

「えっ？ モモチちゃん、誰か好きな人いたの？」

百夏がブンブンと首を横に振る。髪の毛が頬にくっついた。

「まさか。あたしはお父さんの事」

百夏の父親は破産寸前だ。

小さなイヤホンジャックを造る工場を営んでいるのだが、不景気

の波をモロにくらって三年前から会社は大きく傾きだした。

イヤホンジャックといっても、ジャックそのものではなく、一番先についているピンの部分を造っているのだ。

はつきりって、地味すぎる……

小学校の頃には二十人の従業員がいたそうだが、今は父母と五つ上の兄の三人だけで賄っている。

そして二年前、友人が会社を起こす際の借金の保証人に父親がなって、その友人という名の恩知らずは倒産した会社と破産申告だけを残して何処かへ消えたそうだ。

「あたし、年越せるかなあ……」

昨年 of 師走、百夏は冗談交じりでそんな言葉を呟いた。

顔は笑っていたが、瞳はしつとりと潤んでいた。

年を越して初詣に一緒に行った時、史美菜は百夏の姿を見てマジで安堵の息を漏らした。

「もしかしたら、ウチ心中するかもしれない……」

そんな言葉もあったからだ。

その話を聞いたのは、去年の十二月の期末試験が終わって三人でカラオケに行った時だった。

美加はまるつきり冗談だと思い、笑いながらポテトチップをボリボリと食べていたが、彼女より付き合いが長い史美菜はそれなりに百夏の家の実情を知っていた。

だから、年明けは逢えないかも知れないと言う、彼女の深刻な瞳の陰りが怖かった。

それでも何とか持ち堪えて、百夏は無事年を越したし高三に進級もした。

一緒に笑い会う姿なんかを見ると、つい彼女の苦悩を忘れてしまいがちになるが、やはり現実の厳しさは何も変わってはいないのだ。

彼女に忍び寄る男の影が耐えないにも関わらず、百夏が誰とも付き合わないのは家庭が危ういからだ。

彼氏にした誰かにそんな事がバレたらみつともないし恥ずかしい。

以前、一度だけ彼女が口にした言葉だった。

「でも、あれって恋以外に効果あるの？」

「他にも幾つか呪文が在るって」

「じゃあ、お金持ちになれるじゃん」

史美菜は百夏に顔を寄せて笑う。

「直接的な俗欲はダメだって」

だから美加は男に走ったのか。

「性欲はいいの？」

「恋愛の先は自分の力だって、美加は言ってたよ」

「そ、そう……」

ちよつと曖昧な笑みで、史美菜は頷いた。

5・神頼み

史美菜の家は新興住宅街の中にあつた。

小さいけれど、芝生が生え揃う庭と小さなレンガの敷かれたガレージ。

父親はインターネットの広告業を営み、市の中心部に在るビルにオフィスを構えている。従業員が五人ほどの小さなオフィスだが、それなりの収入は確保できた。

母親は専業主婦だが、外出が好きでよく出かけている。

町内会の何かとか、ひまわり会という婦人会とか、いくらでも理由が出てくる。

三つ年上の兄は東京の大学へ行き、一年以上帰郷はしていない。バイトに忙しいと本人は言っているが、向こうで出来た彼女と過ごす方が楽しいらしい事を、史美菜は知っている。

史美菜は美加ほど細い手足をしていないし、百夏ほど胸にボリュームもない。

背丈は三人ともバラバラで、並ぶと凸凹だ。

美加が一番背は高く165センチくらいある。

百夏は160センチくらいで、史美菜はそれより少しだけ低い。

ごくありふれた体型と言えばそれまでだが、確かに史美菜にはコレと言った特徴もなかった。

少しだけ自慢の肩を超える黒髪は、前髪を作らないワンレングスだ。

普段はその前髪を七三に分けてヘアピンで留めている。

体型や背丈に不満はない。しかし、彼女のオデコとヘソから三センチ下のお腹にはごく薄い痣の名残がある。

生まれつき在った黒々とした痣は、小学校三年生の時にレーザー治療で除去した。

しかし、微かに残るその名残は、普段はほとんど見えないのだが、

体温が上がって身体が火照ると紅く浮き上がる。

左のおでこには二センチほどの半月状の痣があった。おなかの方は三センチ四方の北海道のような形の跡だったが、どちらも綺麗に除去できた。

しかし、身体が火照ると僅かに紅く浮き上がる。

史美菜が初体験を済ませたのは、高一の夏の終わりだった。

淫靡いんびと弛緩しかんそして恥じらい……身体が火照ると、下腹部の傷跡はその形状を露にした。

オデコはファンデで目立たないが、お腹は無防備だった。

相手は少し離れた高校に通う同い年の男の子だ。

彼は気付いていたか解らないが、史美菜自身は非情に恥ずかしかった。

身体の全てを見られるよりも、お腹の小さな痣の跡が何よりも恥ずかしかった。

彼とは数回身体を重ねたが、年が開ける前に別れてしまった。

どうして別れたのかイマイチ思い出せないが、何故付き合っていたかとも思い出せない。

嫌いではなかったが、好きでもなかったのだ。

「俺と付き合わない？」

誠実でも軽薄でもなかった彼と、史美菜は嫌いではないと言う理由で付き合い始めた。

一番好きな人に、一番大切なものをアゲルなどと言うこだわりはなかった。

そう言う娘は実際多い。

ただ、切実に守り続ける連中も確かに存在して、そんな娘たちを遅れているとか、今時？ とか嘲る気持ちも特にない。

それぞれに自分の価値観で行えばいいことだ。

史美菜は何時もそう思っていたし、今もそうだ。

ただ、快樂はほとんど体感出来なかった。ほんの入り口に佇む程度の快樂しか味わえない。

その先に行く為には、本当の愛が必要なのかもしれないと、彼女は僅かに悟った。

結局、高一以来セックスはしていない。

美加は年中ヤツているが、そういう彼女を軽蔑したりもしない。それが、美加自身の行動理念なのだ。

百夏は何時誰と済ませたのか史美菜にも判らないが、処女でない事は確かだ。

それは女同士の付き合いで何となく解るのだ。

ティファレント・ベイバーロン・アイオンロゴス・ハディート・ドウドウ・ヌル・アン・ヌテル

土曜日の午後。

史美菜と百夏は再び美加の家の蔵の中にいた。

昨日降った雨が畑の脇に水溜りを作り、蒼い空が浮かんでいた。
こちかせ東風が傍らの雑木林を心地よく吹き抜ける。

百夏の願掛け？ が終わると、再び美加が魔法陣の上端に立った。今回は何を叶えて貰うのだろうか……

「フミもやってみなよ」

「いい、あたしはいいよ」

史美菜は顔の前で手のひらをブンブンと振った。

「ていうか、その事典何処で手に入れたの？」

遊びが終わって一息つくと、史美菜が言った。

「ここに在った」

史美菜と百夏が顔を見合わせる。

美加は古びた本棚を指差した。

「ここって、この本棚？」

「そう」

「なんで、農家の蔵に魔法事典が在るの？」

「そんなの、あたしが知るわけ無いじゃん」

美加は意味不明な自信に満ちた瞳を躍らせる。

史美菜と百夏は再び顔を見合わせた。

なんだか気味が悪い。

誰が何の為に何処から手に入れたか判らない、奇妙な古びた事典。日本語で書かれてはいるが、どう見ても仮名遣いは古いし、カタカナもへんてこだ。

頻繁に書き記された原語は英語ではないし、フランス語やイタリア語とも違う感じだ。

本当に、魔法語なのだろうか……

「美加の先祖って、もしかして魔法使い？」
驚いた。

史美菜は百夏の質問に、驚くしかなかった。

魔法使いのわけがないだろう。どう考えても美加は混血無しの日本人だ。もし混血だとしたら、アジア人だ。

混血といったら、百夏の方がよっぽど先祖に魔女がいそうだ。

史美菜は大きく瞬きをして百夏を見た。

美加は思わず吹き出す。

「そんなわけないじゃん。なんで、あたしの先祖が魔法使いなのよ。ていうか、日本に魔法使いなんていたの？」

お前が言うな……

だいたいこちら側の二人は真っ向からその事典の効力を信じているわけじゃないよ。モモちゃんだって、藁にも縋りたい思いでこうしてあんたの戯言に付き合っているだけなんだよ。

「じゃあ、何であんたの家にそんな事典があんのさ？」

「だから、知らないよ」

美加はそういいながら、胸の前で腕を組んだ。

「お父さんかお母さんに訊いてみたら？」

百夏が顎を突き出す。

「やだよ、そんなの。高三にもなって、この魔法の本ってさ……なんていったら、ヤバくない？」

今でも充分ヤバイって……

史美菜は溜息をつく。

百夏は、今さっき願いを込めたせいかな、この前よりは笑いが少ない。

呪文を唱えるときも、真剣そのものだった。

無理もないだろう。

もう現実的な力、一個人の力ではどうにも出来ない状況にいるのだ。何時家庭が崩壊して、家を失い、学校にも来られなくなるか判らない。

まさに、藁にも縋る気持ちに違いないだろう。

「城之内先輩からの電話って、何時来たの？」

「日曜の夜には来たよ。即効性にビックリしたよ」

「それで？ 直ぐに会ったの？」

「うん。何度か会って、気も合って……で、その次の日曜には身体も合って」

百夏と美加はほぼ真面目に魔法効果について話している。

史美菜は話しに加わろうとしたが、どうしても上げ足的な否定の言葉が出てしまいそうで、躊躇い、結局二人の会話を黙って聞いている。

魔法事典なんて信じられない。

でも、モモちゃんの家は救ってあげたい。

魔法がだめだったら、神様……どうかお願いします。

史美菜は心の中で呟くと、二人の会話に相づちをうつて笑顔を作った。

6・雪の降る情景

「もうダメだ……年末に不渡りが出る」

「でもあなた、一度目は大丈夫でしょ？」

「どっちみち相手先の信用を失って、その後は立ち直れない」

「仕方ないじゃない。今更言っても」

「もうダメだ……」

「ダメなんて言わないで」

「くそっ、ウチは年を越せるのか……」

外は凍てつく風が吹いていた。

百夏がお風呂場を出て階段の前に差しかった時、茶の間から聞こえた父と母の会話だった。

彼女の家は、イヤホンのジャックを製造している小さな工場で、以前二十人いた従業員は全員姿を消し、今では父母と兄の三人で切り盛りしている。

友人が起業する為の借金の保証人になり、その友人は破産申告して尚、サラ金から逃げる為に夜逃げをした。

借金だけが平井家に重く押し掛かった。

タダでさえ自転車操業の町工場に、他人の借金を返す余裕などない。

しかし、返さなければ工場と住まいは担保に取られてしまう。

百夏には詳しい経緯や借金の仕組みはよく判らないが、この家が危機に面している事だけは充分に判っていた。

しかし、彼女にはどうする事も出来ない。

ウリをやれば、少しは家計の助けになるだろうか……

そんな事を何度も考えた。

しかし、地方都市で売春なんてなんだかピンと来ないし、方法だっけどうしたらいいのか判らなかった。

百夏の家が急激に傾いたのは、高校に入った歳だった。

彼女はとりあえず高校に入るとアルバイトを始めた。

シヨップピングモールの入り口に在るハンバーガーシヨップで、それなりの時給はもらえる。

しかし、普段は学校に行っているから、まともに働けるのは土日だけ。

放課後も出来るだけバイトに入るようにはしているが、平日は2〜3時間しか出来ないのが実状だった。

家計を助けるまでにはいかなかったが、お小遣いは一切貰わなかった。

時折母が気を使って財布を取り出すが、その度に彼女は貰う事を拒んだ。

「大丈夫だよ。あたしバイトしてるし」

兄の優^{すぐる}は五歳年上で、大学を中退して家業を手伝っている。

百夏はそんな兄を不憫に思っていた。

自分よりもずっと我慢して、諦めて、妥協して……

百夏がそれを見たのは、高校に入学した最初の冬だった。

あの日も冷たい空気に、暗闇は凍えていた。

小雪がちらつく寒い日だった。

彼女はバイトの帰りに仲間連中とお茶をして、帰宅したのは夜の九時をまわっていた。

シャッターの閉まった工場の前に兄の姿が見える。その傍らにはコートを着て首にマフラーを巻いた髪の長い女性がいた。

道路向かいの街路灯の明かりが届いて、光る雪輪の中で彼女の姿は意外とはつきり見えた。

女性は頬に手を当てる。

涙を拭っている様子だった。

彼女は優^{すぐる}が大学時代から付き合っていた女性で、百夏も一度だけ会った事がある。

ほっそりとして、京人形のような涼しげで暖かい瞳の持ち主だった。背中にかかる艶やかな黒髪がサラサラと揺れる度に、甘くてい

い香りがした。

兄は途中で大学を辞めた。

家の工場を手伝う為だ。

おそらく結婚を意識した付き合いだったのだと思う。

優に触れる彼女の佇まいが、何故だかそれを感じさせた。

しかし、今の優には結婚どころか、デート代の捻出も出来はしない。

女に金を使えない男は、容赦なく切り捨てられる。

彼女は足早に立ち去ると、街路灯の光の境域から凍りつく暗闇に姿を消した。

消えた闇の中からヒールの靴音だけが硬く響いて、小さくなって次第に消える。

優はその場で膝に手を当てるように前屈みになると、肩を震わせた。

百夏には、彼のすすり泣く声が聞こえた気がした。

百夏は、何故あの晩、あんな事をしたのか判らない。

彼を元氣付けたかったのか、慰めたかったのか……

それとも、まだのん気に友達とお茶をして笑い会ったりする軽佻浮薄な自分自身を、傷つけたかったのかもしれない。

幼い頃、五つ違いの兄は百夏を非常に可愛がった。

百夏も優のそばから片時も離れる事は無かった。

彼女が七歳の時、優は既に小学六年生。小学校へ入学したての百夏にとって、六年生の優は学校では遠い存在だった。

それでも朝も帰りも一緒だった。

優はクラスメイトに時折冷やかされていたが、本人は気にしてない。

草野球もサッカーも鬼ごっこも、いつも百夏は兄について行った。優の友達とは、不満そうに愚痴を零しながらも、百夏を仲間に加えてくれた。

兄の後について行かなくなったのは何時からだろう……

優に初めて彼女が出来た時か……それとも自分が始めてブラを着けた時か、既に記憶は曖昧になって霞んでいる。

ただ、一緒にお風呂に入らなくなった後も、トコトコと後をついて回った記憶はある。

ある日、優が振り返った拍子に、膨らみ始めた彼女の胸に兄の手が当たった。

妙な感触だった。

百夏は一瞬止まって、笑みを零した。

恥ずかしくはなかったが、優の顔は震撼しんかんさせた心を隠したような、奇妙な笑みに包まれていた。

冷たい雪は降り続いていた。

サッシの窓ガラスが白く曇って外の景色は見えないが、音も無く降り注ぐ雪の気配は確かにある。

百夏の部屋は温風ヒーターと加湿器を使っていたが、兄の部屋はストーブだった。

ストーブの部屋へ入ると、何だかファンヒーターより暖かさを感じた。

広がる熱の暖かさだ。

穏やかで、穂のかで、微かに灯油の燃える匂いがした。絹のような柔らかい素肌が暖気を吸った。

その夜、百夏は優に処女をささげた。

緊張と弛緩の中で零れる涙は、官能に呑み込まれてゆく。

ストーブの上のヤカンが、シューシューと音を立てて蒸気を発していた。

6・雪の降る情景（後書き）

投稿ペースを少し落としますので、ご了承ください。

7・朗報

週明けの月曜日は、百夏の様子に変化は無かった。

魔法の効果あった？　なんて訊くのもバカバカしいし、効果が無くて多少なりともガツカリしている彼女にそんな話題も振りたい。

火曜日が過ぎて、水曜日。

雨が降っていた。

空は灰色の厚雲で低く覆われて、今日中には止みそうにない雨がひたすら濡れた地面を打つ。

風は生ぬるくて湿り気をおび、朝ドライヤーで丹念にのばした髪が、学校に着く頃には微妙にうねっている。

自転車通学の連中はみな、髪の毛を濡らして教室へ入ってくる。

今日ほど雨が降れば、みんな傘をさして自転車に乗るが、その効果は歩くほどではないのだ。

「もう、超ウザイよこの雨」

何時もサイドを縦撒きにカールしている実穂が不機嫌そうに教室へ入ってくる。

以前はドライヤーやヘアアイロンを持ち込む生徒もいたのだが、在る日校内のブレイカーが飛んでしまう事件があった。

どのクラスも朝の教室で一斉にコンセントに繋いだドライヤーの電源を入れたものだから、ついに校舎の電気容量を超えてしまったのだ。

陽差のない校舎の中は一瞬ではの暗い闇に包まれ、ここそこで悲鳴とざわめきが起こり軽いパニック状態になった。

教職員は何事かと校内を駆け回り、ただのブレイカー落ちと気付いて電源が快復したのは一時間半後の事だった。

それ以来ドライヤーの校内持ち込みは厳禁になった。

史美菜は蒼いパイル地のタオルで肩に伸びた髪の毛を押さえて付着

した湿気を丹念に取り除いていた。
パタパタと足音が近づいて来る。

美加はまだ来ないだろう。雨の日は遅刻ぎりぎり、下手をする
とホームルームのチャイムが鳴ってからひよっこり現れる。

始業の予鈴までは、まだ五分あった。

「おはよう」

明るい声がする。

俯いた顔を上げると、百夏が笑顔で立っていた。

彼女はよく笑う。

家庭の問題をもともせず、他人にはそれを悟られまいとするか
のように、普段からよく笑う。

そして、その明るい笑顔は正直可愛らしい。

小さな鉢植えの色鮮やかなマリーゴールドのように、それは可愛
らしいのだ。

微かなダーククリーンの虹彩が輝く笑顔に、興南高校の男共が惹
かれるのも判る気がする。

その時の彼女の笑顔は何時にも増して輝いていた。

いや、何時もとは違った輝きだ。

何の迷いも無く、何の苦悩も感じられない透き通った輝きがあっ
た。

「叶ったよ」

百夏が言った。

その短い一言で、史美菜は理解した。

叶った……魔法陣での願いが叶ったのだ。

史美菜は半信半疑……いや、ヤッパリ信じられない反面、百夏の
家の事情が好転する事を願い、先週の土曜日以来ずっと心の底で気
に掛けていた。

「ホント？」

史美菜は無表情に応える。

百夏は小さく頷いた。

「昨日の夜遅くに、夜逃げしてたお父さんの友達が戻って来たの。なんか、金と大豆の先物？　で大儲けしたらしくて、現金で三千万返しに来たの」

「ま、マジで？」

確かに今年に入って金と大豆は値上がりが激しいと、ニュースで聞いた覚えがあるけど……

「大マジよ。延滞利息分も置いて行っただよ」

信じられなかった。

信じられなかったけど、正真正銘本心から嬉しかった。

先物取引で元を取り戻すあたりは、その男の資質というか生き様を現していそうだが……

史美菜はそれがあの魔法事典の効力なのか考える事を忘れていた。そんな事はどうでもいいのだ。

モモちゃんの家が立ち直って、不安無く高校生活を一緒に歩んで行ければ、何の効力だろうと関係ない。

それが魔女だって悪魔だって、宇宙人の仕業だって関係ない。

史美菜は勢いよく立ち上がる。

動いた椅子が、後の机にぶつかってガンツと大きな音を立てた。

「よかったね。よかった」

史美菜は百夏的笑顔に負けないくらい、白い歯を見せて笑った。

無意識に二人は手を握り合って、一緒にピョンピョン跳ねる。

湿った髪の毛から穂のかにムースの香りが沸き立って、窓から見える重い灰色の空は霞んでいた。

「もう、こんな大ニュースが在るのに、美加ったらまた遅刻だよ」

ホームルームの予鈴が響き渡っていた。

8・好奇心

あんなに重苦しい灰色の空は、午後になると切れ切れになって薄れていた。

雲の裂け目から薄く蒼い空が覗いて、遠くに光の柱が注がれている。

もしかしたら、あたしがお願いした神様がモモちゃんを助けてくれたのかも。

雲間から注ぐ光の柱を見つめていると、史美菜はそんな事を考えた。

「フミもやりなよ」

放課後、美加が言った。

ホームルームが終わると、掃除当番のない連中はつれないほどにチリジリに教室を出てゆく。

気まぐれに残る者はごく少数で、その中に彼女達はいた。

「これはもう、信じるしかないっしょ。あの魔法事典は、絶対本物だよ」

美加が鼻高々と腕を組む。

「フミは何を叶えてもらう？ 成績？ 男？ 家庭環境は問題ないよね」

百夏が笑う。

「知ってるんだよ、フミ」

腕を組んだ美加が、顎を突き出して嘲笑う。

「な、何をよ」

「あんだ、興南の汐泊孝樹しおはるこうきが気になってるでしょ」

汐泊孝樹は興南高校普通科の三年生だ。

去年文化祭を覗きにいったら、美術部の会場で出逢った。

美加と百夏と一緒に、ほんの退屈しのぎで行った隣の文化祭。何気なく覗いた写真部の隣にそのまま流れで入っただけだ。

そこが美術部の展示室だった。

本格的な油絵からオタクちつくな萌絵のイラストまで様々で、意外に人が入っていた。

その後何度か体育の時間にグラウンドで見かけた。

文化系の部活に在籍している割には運動も得意なようで、サッカーの授業で何度かゴールしたのも見ている。

二年の頃は教室が二階だったので興南高校のグラウンドが一望できるのだが、三年生は一階に教室があるのでほとんどフェンスの向こうは植木が邪魔して見えない。

文化祭の会場では気さくに話したりもしたけれど、その後会話を交わすほどの機会はなかった。

時折朝の通学時や帰りの時間に彼を見かけるが、やっぱり声は掛けられないし、向こうが自分を覚えているかも判らない。

「そ、そんなの、ずいぶん前の話じゃない」

「あれれ？ 先週彼を見かけたら、ずっと眼で追ってたのは誰だっけ？」

「ぐ、偶然でしょ？ 誰だっけな。とか思ったただだよ」

美加は口角を上げて、意地悪っぽく史美菜を見る。

「へえ、じゃあ新情報いらないんだ」

「な、なによ。新情報って？」

史美菜は思わず身乗り出す。

「彼には今、彼女がいらない」

美加は史美菜に向って人差し指を立てると、それを左右に小さく振って自信に満ちた目をキラキラさせた。

史美菜は唾を飲み込む。

「それって、確か？」

「ほおら、喰いついて来た」

美加は近くの机に飛び乗るように腰掛けると

「あたしの情報では、汐泊孝樹は去年の十一月から彼女はいません」
「ヤッタじゃん」

百夏が史美菜の肩に手を置いた。

史美菜は眉間にシワを寄せて腕を組むと、教室の天井を見上げた。

汐泊孝樹はそんなに背は高くないが瘦軀そうくな身体つきをしていた。

興南高校の制服は黒に近い紺色のブレザーで、インナーに淡い水色のワイシャツを着る。

動かたばに撓たわむブレザーの背中そでのシワが、いかにも瘦軀そうくなシルエットを連想させるのだ。

ジャージ姿はやっぱりすらりとして、顔が小さいのか近くで見るとよりも長身に見えた。

興南高校はあまり校則が厳しくないらしい。かなりの長髪もいれば錆色の髪を風にはためかせる生徒もいる。

そんな中で、黒髪の汐泊は特に目立つ風貌ではないのだが、史美菜の目にはどんなに群集に紛れていてもくつきりと浮き上がるのだ。それはつまり、彼を意識し、彼を無意識で探しているからなのだろう。

最後に見かけたのは先週の金曜日の放課後だった。

史美菜が自転車で正門を出ると、彼は友達二人と駅へ向って歩いていた。

少し首が長いのか、何となく猫背の彼は、短くも長くも無い髪の毛を風に揺らして友人たちと戯れていた。

だから史美菜は、彼が電車を通っている事だけは知っている。文化祭の時は何を話しただろう……

孝樹は小学校の時から絵画が好きで、中学の頃はH・R・ギーガーが好きで画集も買ったという事。高校に入ってからラッセンなどのエコロな絵が好きになった事。

ピカソやゴッホなどの芸術画家はよく判らないが、ルノアールの

絵は何となく好きだという事……

激しくなく、暗くなく、淡く優しい色彩が好きなのだそうだ。

史美菜が思い出せるのはそんなところで、結局絵画の話しかしなかったのだと今更ながら悔恨の思いでイッパイだ。

「ね、とりあえずやってみようよ」

美加が笑う。

まったく悪意の無い、無邪気な笑顔だった。

だからと言って、友達の事を親身に想っているわけではない。

二年間の付き合いでそのぐらいいは解る。どちらかと言うと、自分の思うとおりに人を動かしたい欲求があるのだ。

もっと魔法事典を試してみたいのだ。

美加は、魔術の効果をもっと知りたいのだ。

魔法で恋愛？

あまりにも陳腐な発想だ。未だにそういった漫画はあるけど、そんな非現実的な力に頼る自分が情けない。

他人の事なら遊びで付き合えるけど……

それになにより、美加の実験台にされるのも納得いかない。

百夏の家族に平穏が戻ったのは素直に嬉しいが、それが本当にあの魔法事典のおかげかと言えば、そんな証拠は何処にもない。

いつそ誰か憎たらしいヤツを呪って、どうなるか試してみようか

……

しかし、あいにく美加も史美菜も、もちろん百夏もそれほど憎たらしいヤツは思い当たらない。

三人だけの秘密である魔法事典の話題で盛り上がると、帰りもそのまま一緒に校舎を後にした。

正門を出ると最寄の駅とは逆方向に住宅街の路地を抜けて国道に出る。

最初に手を振るのは百夏だ。

工務店や古い商店街のある古い住宅街に彼女の家と工場は在る。

黒髪が風に揺れていた。

ゆるゆると自転車をこいで、彼女と史美菜たちはどんどん遠ざかる。

もう、事典の話はなかった。

あのお笑いタレントはキモイとか、あの俳優はカッコイイとか、他愛も無い話をしながら、二人もゆるゆると自転車を走らせた。

「ねえ、とりあえず魔法事典持って行きなよ」

国道の大通りで信号待ちをしている時、美加が言った。

「持っていつでも仕方ないじゃん」

「眺めてれば、試してみたくなるよ」

「そうかなあ」

「ね、いろいろ見てみなよ」

美加の白い頬が、陽差を受けて笑った。

それは机に置くと、妙に収まりは悪かった。

史美菜は学校の帰り道に美加の家に立ち寄って、彼女に勧められるまま魔法事典を借りて家に帰った。

よく在る百科事典の一冊のように、A4サイズのハードカバーで厚さは10センチほどある。

茶褐色の布で出来た表紙のカバーは、金色の何かで幾何学模様が描かれ、中央にキリストの張付けのような絵が描かれていた。

インクか染料か、金色は部屋の蛍光灯の光を受けて、細く怪しく光を放つ。

書籍の淵に沿うように、色んな文字が縦横に書かれている。美加がいうところの魔法語だ。

所々に薄いシミが滲んでいる。

いったい何のシミだろうか……？

史美菜は表紙のカバーをそつと指でなぞってみた。

和紙のような、キャンバス地のような、ザラザラして滑らかで……

…不思議な感触だ。

開いてみると、ホコリの匂いが舞った。

ホコリの匂いだと判るのに、それは何故か穂のかに甘い。

机の上には封を切ったポツキーが置いて在るが、その匂いで無いのは確かだった。

ページの紙は日焼けか劣化か、茶色く変色している。

真っ黒なインクの活字は最近の印刷技術とはほど遠く、漢字の小さな造りやアルファベットに似た文字の節々も滲んで潰れていた。

前半には理論めいた解釈や原理うんぬんなど、うんちくがひたすら書き綴られている。

原理ってなんだよ？

読む気にならない……

史美菜はパラパラとページをめくった。めくるたびに、穂のかに甘い香りが鼻孔に纏わりつく。

呪文で唱えた『ティファレント』の意味が載っているところで目が止まる。

「天使の現れる場所……？」

どういう意味か解らない。

ベイパロンの意味は『娼婦』だそうで、男、金銭を呼び集めるのだと言う。

「これって、俗欲じゃないのか？」

史美菜はブツブツと一人言を呟きながら、サラサラとページを捲った。

「ア・カ・ドウア・トウフ……」

妙なカタカナが並ぶ。

死者を蘇えらせる呪文と書いてあった。

気持ちわる……全部読まなくてよかった。

史美菜は身震いしてページを再びめくる。

とにかく……いろんな意味でアヤシイ……信じ難い……そして、
気味が悪い。

単純だが、確かな感想だ。

美加のように、興味で心が満たされたりしなかった。

冗談でも死者を蘇えらせる呪文なんて、口にはできない。したくない。

もちろん、呪文を口にしただけでは何の効力も無いのだろうが、
やっぱり気持ち悪い。

次のページには、666の意味が書いてある。

いや、意味ではない。解説か？

『野獣666の元素……木星の天と、ウノの中のオムニア すなわち諸元素の天球層に……』

「何これ？ ぜんぜん意味解んない」

史美菜はパタンつと音を立てて事典を閉じると、ひとつ息をついて机の隅にそれを置いた。

何だか異常なほど違和感があった。風景としての収まりが悪い。

指先に古紙特有の古びて饅えた臭いがこびりついていた。

「変な臭いがする……」

母親が階下から呼ぶ声がした。

彼女は左手で摘んだポツキーを口に咥えると、夕飯の仕度が出来た台所へ向って部屋を出たが、まずは手を洗いたくて階段を下りると直ぐに洗面所のドアを開けた。

10・遅刻

風が暖かった。

史美菜は朝起きた時、なんだか何時もと違う陽差の暖かさを感じて、目覚ましも鳴らないのに目が覚めた自分に賛嘆した。

カーテンの向こうに外の白い光が透けていた。今日はやけに寢覚めがいい。

しかし違っていた……

目覚ましは何時の間にか止まっていたのだ。時計の針は幻覚のような位置を指している。八時を一分ほど過ぎていた。

うそ！ ヤバイ。

史美菜は現実に取り戻されるように飛び起きる。

何時もと違う陽差を感じたのは、時間が何時もより遅いからだっ

た。

キッチンを覗くと、誰もいなかった。

そう言えば、母親は朝から何処かへ出かけると言っていた。史美菜は冷蔵庫のドアを開けると、ヨーグルトをひとつ取り出しスプーンでかき込むように食べると、急いで玄関を出た。

自転車をもつてパイを漕いだ。

ヤッパリ風は暖かった。

頬を照らす朝の陽差が眩しくて熱くて、国道に出る頃には背中と額に汗が滲んでいた。

暑い……最悪。

交差点で信号待ちする仲間はいなかった。

南原女子高の生徒の姿はいないのに、興南の生徒が数人いる。

隣の興南高校は、始業時間が五分遅いのだ。

男子生徒に囲まれて、史美菜は横断歩道の信号を待った。

額に汗が滲んでピンで留めた前髪の後れ毛が額に張り付いて、微かな半月型の赤い痣跡が浮き出ている。

ファンデーションを塗ってる暇は無かった。

史美菜は体育など、予め身体を動かす前には、こつそり薄くではあるが額にファンデを塗る。

目立たないとはいえ気になるし、自分で鏡を覗けばやっぱり目立つのだ。

しかし、今はそれどころじゃない……信号が青になると、彼女は急いで自転車を走らせた。

コンビニの角を曲がって住宅街を抜けると、正門を目指す。

腕時計を見る。ホームルームが始まるまであと五分。

お喋りに湧きながらのんびり歩いている生徒を追い越す。彼女らは完全に諦めているのだろう。

ひとつ角を右に行けば、直ぐに南原女子高の大きな正門だ。両脇に大きな花壇が植えられて、この時期はあじさいが植えられる。

史美菜が勢いよく路地を曲がろうとした時、左から二人の男子生徒が走りこんで来た。

「うわっ」

「きゃっ！」

一人が史美菜の自転車にぶつかって、よろける彼女をもう一人の男子がぶつかりそうになりながらも支えてくれた。

慌てて足を地面に着いて、何とか史美菜は転ばずに済んだ。

「ご、ごめん。大丈夫？」

「あ、うん……」

史美菜が視線を上げると、自転車のハンドルに手をかけているのは汐泊孝樹だった。

「あっ」と史美菜は声を上げると、孝樹も瞳を大きくする。

「あ、キミって確か……」

史美菜は無言で笑顔を送る。

校舎の中から、ホームルームの予鈴が鳴っているのが聞こえた。

教室に着いた時はもう、額も背中の中も汗もひいていた。しかし、ホームルームは既に始まっている。

教室の扉をそつと開けると

「アウツッ」

と森原ゆきは言った。

森原ゆきは史美菜のクラスの担任で、国語教師だ。

「珍しいね、フミが遅刻なんて」

担任も史美菜の事はフミと呼んでいる。

化粧つけない輪郭のハッキリした顔は教師らしく、鼻の高い横顔は少し美人だ。

史美菜は苦笑いで首だけの会釈をしながら自分の席に向う。向いながら美加の席を確認すると、彼女はまだ来ていなかった。

史美菜は席に着きながら、何となく安堵の息を着く。

自分より後に来る生徒がいれば、自分はそれよりはマシな存在になる気がした。

しかし、美加は学校を休んだ。

サボリ以外では滅多に休まない彼女が、風邪を引いたらしい。

今までなら、風邪を引いてもウダウダしながらブツクサ言っ、とりあえず学校には来た。

彼女は独りが嫌いなのだ。

家にいれば当然他の家族はいるが、誰か仲間に会いたくなるらしい。

ヒョロリとしたモデル体型の彼女は、叩いたら折れそうだが意外にしぶとく健康だ。

だから彼女は滅多に学校を病欠しないしフケたりもしない。

フケる時は、間違いなく男が一緒だ。

しかし、今日ははつきりと担任の森原が、彼女は風邪で休みだと言っていた。

今朝、親から連絡があったので間違いないらしい。

珍しい事もあるモノだと言ったのは、史美菜でも百夏でもなく、
普段あまり目立たない桜木夙さくらぎふくだった。

彼女は史美菜を見て、小さく笑う。

色白の顔は周囲の明るさに反して、やけに翳かげっていた。

11・二人乗り

美加は今日も学校へは来なかった。

風邪のウィルスが直接体内に入り、胃腸炎を併発したらしい。

史美菜は少し心配だったが、実はそれどころではなくて、彼女には他の用事ができていた。

放課後、帰り道とは逆方向の駅へ向かうと、駐輪場で待った。

今日の昼休み、学食と校舎を繋ぐ栈橋でフェンス越しに孝樹を再び見かけると、そのまま暫く話しこんだ。

校舎の裏から学食に繋がる栈橋は、隣の高校とを仕切るフェンスの近くに在る。

フェンスの向こう、隣の興南高校は体育館が位置しているのだが、弁当やサンドイッチを食べる連中はその体育館の陰の段差によく腰掛けているのだ。それが、南原高校側を向いている。

史美菜に気付いた孝樹が手を振って、彼女もそれに応えた。上履きのまま土を踏んでフェンスに駆け寄る。

文化祭などではなく、日常で再び出逢った二人は自然に言葉を交わす事ができた。

学校帰りに会おうという事になり、駅の駐輪場で待ち合わせというわけだ。

興南高校は、他校からの人気が意外と高い。

スポーツが盛んで、それなりに素行不良な連中もいるが学力もそれなりにあるし常識的で、見た目ほど凶暴じゃない。

それが、周囲の同世代からの評価だった。

もちろん、モテない連中というのは何処にでも存在するが……

薄曇りの空から、太陽が見え隠れして風を暖めていた。

興南高校は始業時間が五分遅い分、終わるのは五分遅い。

掃除当番だと言っていたから、もう少し待たなくてはいけない。

興南の制服を着た連中の姿がぼちぼち現れて、何人かが駐輪場へ

入って来た。

自転車を数百台置ける大きな場所で、腰ほどの高さのフェンスでぐるりと囲われている。

どうしてここに自転車を置くのだろう……興南にもりっぱな駐輪場はあるのに、何故目と鼻の先に在るここへ？

史美菜はすまし顔で、彼らをさり気なく観察していた。

すると、彼らが触れたのは原付バイクだった。

かなり遠方で、公共交通機関の乏しい地域から通う連中は、バイク通学が許される。しかし、よほどの悪条件でない限り、バイクでの通学は禁止なのだ。

おそらく彼らは許可のないバイク通学者たちなのだろう。

低く高らかな笑い声が響いた。

彼らは各々にバイクのエンジンをかけると、小さな集団となって反対側の出口から消えた。

「まった？」

振り返ると、孝樹が来ていた「どうしたの？」

「うん、こっそりバイクで来てる人がいるんだあって」

「ああ、こっそりって言っても、学校側も察しはついてるんだ。何も言わないけどね」

孝樹はそう言って笑った。

陽差の暖かさが、胸の奥を高鳴らせる。

久しぶりに感じる高揚感に、史美菜の頬が熱をおびる。

駅からは見えないが、時折通り過ぎる興南と南原の生徒の視線が、遠くから浴びせられた。

もっとひと気の無い場所で待ち合わせするんだ……

「ずっと電車で来てるの？」

「ああ、一年の時は下宿してたんだけど、去年道路が綺麗になってバスが速くなつてさ。今は家から通ってるんだ」

孝樹の家は二つ先の駅からバスで海沿いを廻り、小さな峠を二つ越えた小さな町だ。

国道なのだが道幅が狭くてバスはゆっくりしか走れなかった。

去年の初めに峠を二つとも貫いたトンネルが完成した為、以前は40分かかった道のりが15分で辿り着くようになった。

史美菜のクラスにも一人だけ同じ町から来ている生徒がいるので、それは知っていた。

「そうか、芳江と同じ中学だったんだ」

孝樹は小さな町の小さな中学の話をした。

市内の端に位置するような町の中学は何処もそうで、1クラスかよくて2クラスしかないのは常識だった。

野球部は無く、個人技のスポーツが比較的盛んな事も、特長のひとつだった。

史美菜は中学の時に卓球部にいた為、田舎の学校ほどそう言った小人数成のスポーツが異常に強い事を知っている。

もちろん、孝樹のいた中学も名前は知っていた。

史美菜は市の中心部で育った為、中学でも各学年が6クラスあった。美加の学校は小さかったが、それでも3クラスあったと聞いている。

どんな話しても楽しかった。

特に、自分の知らない話は些細な事でも興味を示して大きく相づちを打つ。

何時もより30%増しで笑った。

心が躍る。

バス停のある駅まで歩こうという話しになって、史美菜は自分の家が遠ざかると不平を言いながらも内心は欣快きんかいな思いで自転車を押して歩き出す。

駐輪場から出ると、孝樹は史美菜の自転車のサドルに跨った。

「後、乗りなよ」

ワクワクした。

二人乗りの自転車は、ワクワクする。

些細な交通違反で世間に抗う事が楽しいのか、誰かと一緒にひと

つの自転車を共有する事が嬉しいのか判らないが、とにかく心が弾む。

荷台に横乗りした史美菜の短いスカートが、風を拾ってはためいた。

「痛ったい！」

歩道の段差を越えた時、ステンレスの荷台は容赦なく史美菜のお尻に衝撃を伝える。

本当はそれほどでもなかったが、彼女は少しオーバーに声を出して孝樹の背中に手を触れた。

サラサラしたブレザーの背中には、心地よい生地の手触りがした。

12・変化

住宅街の路地を抜ける。

興南高校の生徒も南原女子高の生徒も歩いていた。中には仲睦まじく並ぶ男女の姿も在る。

車通りの多い道に出ると、小さな歩道に沿って進んだ。

自転車でのこの辺りを通らない史美菜は、見慣れない風景に視線をめぐらせる。

「あそこのマンション……」

孝樹が指をさした。

道路から少し入った住宅街の中腹に、五、六階建ての茶色い外壁のマンションが見えた。

「あれが、何？」

「先週自殺騒ぎがあつたマンションだよ」

ニユースで知っていた。

専門学校生が、市内のマンションから飛び降りたのだ。

幸い駐輪場の屋根にぶつかつて、小脇の垣根に落ちたらしく命は取り止めたらしいが、意識不明と聞いた。

「飛び降りたのは、あのマンションさ」

孝樹はいささか無表情で言つた。

「知つてる人じゃないでしょ？」

「ああ……でも、彼女の付き合つていた男は、ウチの学校の先輩でさ……別れ話からのトラブルらしいよ」

彼は正面を見たまま応える。

「先輩はどうしたの？」

史美菜は孝樹の背中に問う。

「さあ、別に親しいわけじゃないから。でも、もう新しい彼女がいるらしいけど……」

「そうなんだ……」

恋愛のトラブルで自殺などというドロドロした現実なんて本当にあるのだと思った。

どこかドラマ的で、非現実的だ。

そんな事はあっても都会での出来事に過ぎないのだと勝手に解釈していた。

孝樹はそれから直ぐに、再び自分の住んでいる地元の話しをした。海が近くて、気が向けば泳ぎにいけるが穴場を狙った海水浴客が路駐をして困るそうだ。

史美菜は彼の話を聞いては、大げさに笑い声を上げた。

周囲の視線は、自分たちをどれだけ親しい関係だと思っただろうか。ラブラブカップルだと思っただろうか……

二つ目の駅は意外なほど近かった。

もつと一緒に自転車で走っていたかったが、一時間に二本しかないバスの発車が迫っていた。

「じゃあ、また」

孝樹は明るい笑顔で手を振ると「帰り、気をつけてな」

史美菜も手を振って頷く。

「大丈夫。じゃあね」

胸の奥で、キュンと何かが萎んだ。

そんな遠くに帰るわけでもなく同じ市内に住んでいるのに、何だか遠距離恋愛を体感したような勝手な想いが胸の底から競りあがって来た。

毎週訪れる憂鬱な月曜日。

しかし雲ひとつ無い旻天は、まるでガラスに蒼インクを垂らした

ように輝いている。

史美菜の心に憂鬱は無かった。

学校の帰りだけが、汐泊孝樹と会える時間なのだ。

あれから何度も一緒に帰り、会話を交わしたが、休みの日に逢う約束はできなかった。

今はそれでもいい。

少しずつ進展させればいいと思った。

教室に入ると、見慣れない生徒の姿に一瞬視線が止まる。

しかし、それがよく知る生徒だと気付くのに一秒もかからない。

「も、モモちゃん？ どうしたの？」

百夏は黄金色に染めた髪を揺らして明るく笑った。

「だって、もう我慢しなくていいじゃん」

「いや……我慢って？」

「何もかもよ」

百夏は彼女なりにいろんな事に躊躇し、我慢して来た。

化粧品も洋服も最小限に抑え、彼氏を作る事さえ拒んできた。

家庭の事情、兄の苦悩を考えると、もう何でも我慢できた。逆に、

高校生らしい贅沢は、彼女に罪悪感さえ与えた。

その呪縛から開放された百夏は、身も心も自由になった。

「うん。似合うじゃん」

百夏には黒髪が似合うと思った。

淡くグリーンがかった彼女の瞳には、黒髪が似合う。

しかし、史美菜はそれを気持ちの奥に留め、似合うと言った。自分だったらやっぱりそう言って欲しいと思うから。

自分の髪に触れた百夏の爪は、艶やかなクリアピンクに輝いていた。

「ほんと？」

「美容室いったの」

「うっん。自分でやっちゃったよ」

その辺がまだまだ、今までの節約生活が染み付いているのだろう。
「でも、イイカンジだよ」

史美菜は百夏の柔らかい髪に触れた。

脱色系カラーリングのせいかな、前よりも質量が軽く弱々しく感じた。

13・不透明な彼女

「美加のところ、行ってみようと思うんだけど」

放課後、そう切り出したのは史美菜だった。

「えっ……」

百夏は少し考えて「ゴメン」と言う。

史美菜は正直驚いた。

美加は百夏が保健室へ行くと人知れず覗きに行つて元気付けたり、もちろん暇つぶしでも在るのだが……話し相手になつてあげたり、根底の理由はどうであれ、様子を覗いに行く優しさがあった。

だから、以前インフルエンザで美加が長期学校を休んだ時、家の方角が全然違うのに「様子見に、行ってみようよ」と言つたのは、百夏だった。

それなのに、髪をキャメルブラウンに染め、爪には淡いクリアピンのマニキュアを塗つた百夏は、用事があつて行けないと言う。

「そう……」

「ゴメンね」

百夏はそう言つて、スライド式の携帯電話を取り出した。

鮮やかなマリンプルーが眩しい。

「携帯、買い換えたの？」

「うん。もう三年以上使つてたから」

最新機種だった……

百夏は携帯の買い換えもずっと我慢していた。

周囲のみんなは、少なくとも高校に入った時に買い換えてる。

「ネットなんて使わないから、電話とメールが出来ればいいよ」

それが彼女の口癖だった。

美加に限つては毎年買い換えて、小学校から数えて7台目の機種に先月買い換えたばかりだ。

ずっと我慢してたから……百夏の視線から、そんな言葉が聞こえ

てきた。

大容量ハイスピードダウンロードが可能で、地デジも観れる、高画質液晶の最新型のフラッグシップ機種だ。

「じゃあ、あたし帰るね」

百夏は会話をしながらメールを打ち終わると、教室から出て行った。

史美菜が校舎を出た時、携帯にメールが届いた。

孝樹だった。

史美菜は美加の見舞いに行くので今日は会えない事を書き込むと、送信ボタンを押した。

美加の家に行くと、母親の対応は暗かった。

「何だか容態が悪化してね、昨日から内科に入院してるの」

小さな花柄のエプロンで玄関先に出て来た母親は、蔭りのある笑顔で史美菜に向けた。

敷地を出る間際、ビニールハウスから出て来た父親に会った。

史美菜は小さく会釈をすると、自転車に乗って帰路につく。

橋を渡って既に青々と茂る桜並木の堀沿いを走ると、前方に見覚えのある誰かが立っている。南原女子高の制服だ。

低いフェンス越しに植えられた、青葉の茂る桜を眺めている。

史美菜は眼を細めてそれを見つめながら自転車を進めた。

次第に近づく人影を見て「嗚呼」^{なうひ}と思わず小さな声を出す。

じっと佇んでいたのは、桜木夙^{なほ}。自分と同じ名前の木だから、好きなのだろうか……青葉の桜を眺める人は、あまりいない。

桜木夙は三年になると同時に転入して来た、いわゆる転校生だ。

高校の転校なんてドラマか漫画の都合だけの出来事だと思っていた史美菜は、彼女に少しだけ興味があつた。

しかし夙は影が薄い。

教室にいても、まるで気配を消し、身体を透明にしているかのよ

うに存在感が皆無なのだ。

史美菜が自転車のブレーキを握ると、微かなノイズが響いて夙は振り返った。

白い……

改めてそう思った。

彼女の顔は真っ白に艶やかだった。

美加もかなりの色白だが、その質感は別物だ。

美加の白さは、瑞々しく透き通った水菓子のような白さ。でも、夙なみの白さは陶器を思わせる硬質なものだった。

しかし、どちらも美しい。

「桜木さん……どうしたの？」

史美菜は自転車を止めて、振り返った夙に声をかける。

「ウチ、こっちなんです」

会話を交わしたのは初めてだった。

新学期が始まって二ヶ月以上経っているのに、初めて話した。声は……以前聞いたことがあるような無いような。

低く小さく、でも以外に通る声だ。

「あ、そうなんだ」

愛想笑いで応える「じ、じゃあね」

話す事はない。史美菜は自転車のペダルに足をかけた。

「あなたたち、魔術を使いましたね」

背筋の産毛が逆立った。いや、背中にそんな産毛が在るとは思いたくないが、まるでそんな感じにゾワゾワと素早く冷たい電流が脊椎に沿って這い回った。

「な、何？」

「魔法の事典を使ってしまったんでしょ？」

夙の表情は変わらなかった。

ぼんやりと青々とした葉桜を眺めていた瞳のまま、言葉を発する。
「何でそんな事？」

史美菜の言葉に、夙は小さく笑った。

いや、実際は笑っていないのに、そう見えただけかもしれない。

14・漆黒の生き物

魔法事典で……もしかしてそう言った趣味のある連中にとってはメジャーなアイテムなのだろうか。

古びた風合いを出す事は、今の技術なら可能だとテレビで見た事がある。

近場にそんな趣味の連中は知らないが、もしかしたらネットの何処かで活発に盛り上がっていたりするのだろうか……

史美菜はそんな事を考えながら、彼女の白く不透明な頬を見つめた。

「あの呪文は、強い信念に反応して願いを叶えてくれるのです……」
この世界に魔法は存在するのだろうか？

もしかして、ごく当たり前の事？

「どうして、桜木さんが？」

史美菜の問いに、なぎさ凪は応えなかった。

「あの呪文には副作用があるのでですよ」

「副作用？」

「作用には、必ず反作用があります」

意味が判らない。

反作用の意味は判るけど、魔法と何の関係があるのだろうか。

「反作用？」

「願いが叶ったら、その分何か代償を払う事になります」

「何それ？ 代償を払わないと、願いは叶わないの？」

「違います。願いが叶ったら、代償です」

凪は相変わらず無表情で、どういう意図で言葉を発しているか判らない。

「願いが叶わなければ、代償は要らないの？」

「そう言うことになります」

風が吹いて二人の間をすり抜けると、桜の葉を揺らした。

さつきまでとは異質な、少し冷たい風。

「代償つてなに？ 拒んだら？」

「それは出来ません。代償は絶対です」

彼女は冷たく怜悯な笑みを一瞬浮かべると

「願いには形がありません。固形物ではないから……だから、反作用で働く代償も形が無いのです。拒む事は出来ません……」

史美菜は夙の顔を見ていた。

黒い瞳はヤツパリ何処か硬質で、まるで蠟人形のように体温を感じない。

見つめられても、見ていない。

いや、確かに自分を見ている。

「あんた、何モノ？」

思わず出た言葉だった。

この娘こそ魔女かもしれない。そんな馬鹿げた想像が脳裏を駆け巡った。

血の通った温かみをまったく感じない。

「南原高校三年C組み、桜木夙」

彼女はこれとっておどけるでもなく、いたって真面目に応える。からかっているのか、真剣なのか計り知れない。

史美菜の疑問は他にもあったが、それがあまりにも多くして何から訊けばいいのか判らない。

何より気味が悪い。

キモイという表現で回避できないほどリアルで冷涼だ。

はつきり言つて怖い……今すぐここから立ち去りたい。いや、立ち去るべきだ。

バサバサッと、突然影が横切った。

史美菜は自分の目の前を横切った黒い影が何だか判らなくて、思わず瞬きした後周囲に視線を巡らす。

空には何も無かった。

カラッと晴れた青空だけが、ただひたすら広がる。

しかし、視線を夙に戻すと、思わず驚愕した。

ビックリではない、『驚愕』だ。

夙の右肩にカラスが乗っている。

カラス……カラスって人に乗るの？　ていうか、この女は平気なのか？

白い顔の隣には、漆黒の鳥。

パチパチと瞬きしながら、やたらキョロキョロする漆黒の生き物。普段対象物が無くて気付かないが、夙の細い肩に乗ったその生き物は、予想以上に大きい。

「か、カラス……」

史美菜の言葉に彼女は何にも反応しない。

「そのカラス……桜木さんの？」

「まさか」

肩に乗ったカラスを追い払おうともしない……

史美菜は彼女の顔に視線を預けたまま、自転車のペダルを踏もうと足をかけるが、滑って踏み外す。

慌てて足を掛け直し、体重をかけてペダルを踏む。

気持ち悪い……関わってはダメだ。

無心でペダルを踏んだ。

早く彼女から離れよう。距離をとろう。

十数メートル走ってから振り返った時、彼女の姿はもう無かった。再び涼しげな風が吹いて、並木の葉桜をザワザワと揺らしていた。

15・羽音

庭にボケの花が咲き乱れている。

真つ赤な花が幾つもの群れをなして生い茂るそれは、何年かに一度切ってはいるのだが、何時の間にか枝を伸ばし幹の本数を増やして絡み合うように上に、横に伸び盛る。

史美菜は縁側から洗濯物を取り込みながら、ふと目が止まる。

「年に何度も花を咲かせて、ボケているからボケの木って言うんだよ」

以前祖母から聞いた話だ。

しかし、辞書で引くと木瓜となっているから、それがなまって「ボケ」と呼ぶようになったのだろう。

「カア」という鳴き声が聞こえた。

史美菜はビクリとして、視線が中をさ迷う。

桜木夙の肩に止まったカラスの姿が脳裏を過る。

つけられた？ まさか……カラスなんて何処にでもいるし、だからどうしたっていうの？

電線に一羽のカラスが止まっている。

しかし、向こう側を向いて、特に史美菜に興味を示すわけでもこちらを観察しているわけでもない。

カラスに観察？ 馬鹿げている。

史美菜は思わず苦笑を浮かべたまま、洗濯物を掴んで家の中へ入った。

机の上に不釣り合いに置いてあるぶ厚い事典が、何処か謎めいたくすみで存在感を主張している。

……作用と反作用……史美菜の頭の中で、夙の言った言葉が勝手にさ迷い歩く。

等価交換ってこと？　なんだか何処かで聞いた話だ。

そんな原理でこの世が動いていたら、犯罪者はみな何らかの罰を受けるはずだ。それなのに、今だ裁かれていない犯罪者が五萬とい
るではないか。

史美菜は事典に手を伸ばす。

ページを開くと、古びた甘い香りがふわつと湧き上がる。

反作用なる罰則については何も書かれていない。

史美菜は静かにページをめくる。

文字が重い……硬質な活版印刷の活字は、現代っ子の史美菜には
重く感じて読み進められない。

文学少女ならなんの抵抗も無いのだろうが、史美菜はそうそう活
字を読む習慣もない。

美加はこの呪文で本当に願いが叶ったのだろうか。だから、その
見返りに自分の身体を壊した……？

じゃあ、モモちゃんは何？　彼女もこの書籍に載っていた呪文で家
族が救われたとしたら、モモちゃんもいずれ身体を壊すのだろうか

……？

史美菜が事典をパラパラと捲る。

捲るたびに、穂のかに甘い古木のような香かあり気が漂う。

玄関で物音がした。母親の帰宅だろう。

史美菜は事典を閉じると、部屋を出た。

「あれ？　お父さん今日は早いなだね」

史美菜が階段を降りると、リビングで背広を脱ぐ父親の姿があっ
た。

「ああ、少しな。でも、もう八時だぞ」

「あつ、本当だ」

史美菜は瀟洒な金色の振り子が動く、洋風のお城の型をした置時計を見る。

「お母さんまだだよ」

「ああ、今日は少し遅くなるらしい」

「電話きたの？」

「いや、メール」

「そう……」

史美菜が小さく肩をすくめると父親は

「飯、買って来たぞ」

そう言って牛丼屋の袋を掲げた。

中には大盛が二つ入っている。

「別に、言ってくればあたしが作るのに」

「まあ、いいじゃないか」

父親は笑いながらキッチンへ行くと、湯飲みを取り出す。

史美菜は再び肩をすくめて小さく溜息をつくときッチンへ入り

「お茶ぐらいあたしがやるよ」

暗い漆黒の闇が何処までも広がっていた。

何も見えないのに、何かの気配。生き物がいる。しかし、その姿は果てしない闇に閉ざされて見えない。

バサツと羽根の羽ばたく音。史美菜はそれがカラスだと直感した。闇の中に丸くて小さな眼がチロチロと光った。瞬きしたのだろう。そして背中に他の気配。

振り向かずとも、それが誰なのか、彼女には判っていた。

全てを飲み込む闇の世界に、白い陶器のような顔がふわりと浮かんでいた。

桜木夙……

冷たくて無機質な瞳が、史美菜を見つめていた。
しかし、彼女は何かを言いたげで、何も言わない。ただ鉾物のよ
うに深い光沢の瞳が、史美菜を捉えて放さなかった。

15・羽音（後書き）

少し更新頻度が遅れています。

下書きは26話くらいまで進んでいますのでご安心下さい（苦笑。
ちよつと暗いのが……

16・代償

ベランダで小鳥の囀りが聞こえる。

史美菜はまどろみの中でその雑音を聞いた。

雑音なのに心地いい。

薄っすらと開いた目は、カーテンを通して降り注ぐ浅い陽差を感じ取った。部屋の本棚や小さなテレビが視界に浮き上がる。

彼女は何かを思い出したように飛び起きた。

何時もの自分の部屋は、何も変化は無かった。

チェストの上のヘアムースの缶がひとつ倒れている。

「夢……？　だよね……」

史美菜は寝癖でもっさりした髪の毛に手を当てて呟いた。

いかにも黒い三角のトンがり帽子が似合いそうな桜木夙。

彼女は本当にクラスに存在するのだろうか……自分が見えている

だけで、本当は存在しないんじゃないか？

史美菜はそんな錯覚さえ覚える。

あの席は、もともと空席でクラスのみんなは桜木夙なんて知らないのではないか。

教室のドアを開けると、何時もの時間に来るいつものメンバーが朝の教室のここそこに小さくたむろして話しこんでいた。

廊下側の一番後ろの席……史美菜は三上瑠衣の頭越しに覗き込む。

……いるじゃん。

小さな溜息をつく史美菜の視線を瑠衣が追って、怪訝に微笑む。

史美菜は「別に何でもないんだよ」という素振りで、そのまま窓際にある自分の席に向った。

ホームルームが始まって気付いたが、その日は美加の他にも欠席者がいた。

夙の姿に気をとられて気付かなかった。

百夏が来ていない。

が、百夏はよく身体の不調を訴えて休むし、途中で保健室へ行く事も多いからそれほど珍しい光景ではない。

一週間以上休む美加の姿に比べれば……

「ねえ、百夏変わったよね」

「そうそう、なんかあったのかな？」

「ケイタイ新機種持ってたよ」

「あたしアレ、親に買ってくれていったら『バカ』って言われた」
お昼休みにそんな会話が聞こえた。

それらは雑談のネタのひとつに過ぎなくて、彼女達はすぐに他の話題に移っていく。

ぐるぐるとひと通り話題が駆け巡って、要所要所で笑い声が響く。
「ウリでも始めたのかな？」

史美菜はピクリと身体を震わせて聞き耳を立てる。
再び百夏の話が出たのだ。

「違うんじゃない？ 百夏の家って、一応工場経営でしょ。大口の発注でも入ったんじゃないの？」

「ああ、だから羽振りいいのか……」

史美菜は何故だか静かに胸を撫で下ろす思いだった。

「ねえフミ、なんか知らないの？」

右後方から声がかかる。

クラス一お喋りの、川口陽菜^{かわぐちひな}だった。

正確は悪くはなく、気さくで誰とでも仲良くなるタイプなのだが、とにかくお喋りが好きで授業中でも寝ている時意外はたいいて喋っている。

だから、私語にウルサイ数学の岩田鉄夫の授業ではずっと眠り続けている。

喋りも風貌も異常に怖くて、ヤクザのような数学教師の岩田は、授業の邪魔さえしなければ寝ていても何も言わない。

史美菜が振り返ると、陽菜は机の上に座ったままこちらに身体を向けている。

「ああ、あたしも判んないんだ」

フミは笑顔で応える。

魔法が原因なんて、口が裂けても言えない。

魔法が原因で……？　と言う事は、モモちゃんの変貌は夙の言っていた反作用？

でも、アレが反作用だとしたら美加の病気に比べてあまりに軽いというかオイシイと言うか……

史美菜は考えもしなかった。

家庭環境が変わって百夏は変わった。と言う事は、きっとそれが百夏に与えられた反作用なのだろう。

しかし何故？　片や入院までしたというのに、もう片方は最新の携帯電話まで手に入れている。

史美菜は机の上に肘をついて、窓の外を眺めた。

ぽっかりと浮かんだ雲がひとつ、旻天（みんてん）に漂う。

作用と反作用にはムラがあるのだろうか……それとも、純粹に家族を救ったモモちゃんに対して、やっぱり男関係を願った美加に重い代償が課せられるのだろうか……

史美菜はふと夙（なぞと）が気になって再び振り返る。

相変わらず独りの彼女は、陶器のような白い頬をさらし静かに読書をしていた。

耳にかかった黒髪が、はらりと数本俯いた頬の横に落ちて垂れ下がる。

遠くの空で、カラスの鳴き声が聞こえた気がした。

16・代償（後書き）

お読みいただき有難う御座います。

誠に申し訳ないのですが、当分スローペースでの投稿となります。

17・魔女の森

見上げる空には薄っすらと雲が浮かんで、照りつける陽差を妨げるような少し強い風が電線を揺らしている。

時折吹く狂ったような突風は、電線をビュービューと唸らせた。

史美菜は学校から帰ると、ジーンズに着替えて再び外へ出る。

彼女が住む住宅街を出て、三年ほど前に整備されて広くなった大通りを高校とは反対に向って走る。

向かい風が空気の壁となって行く手を阻んでいるような気がした。路地を曲がると、小さな住宅街の向こうに小高い丘が見える。

山というほどの大きさではなく、高台と言うには黒々と木が生い茂っている。

古い家屋の並んだ住宅街を抜けてしばらく行くと古くからある幼稚園が在って、史美菜は幼少の頃そこへ通っていた。

どうして急に彼女がこの場所へ来たのかというと、その幼稚園の裏側からは杉とクヌギが鬱蒼と茂る雑木林が小高い丘に向って続いているのだ。

彼女が幼稚園の頃、その雑木林は魔女の森と言われていた。

草木が生い茂るそこは、どんなに天気がよくても日光を遮断して暗く蔭っていた。

園長先生や担任からも、林の中には入らないようにと厳しく言われていた。

史美菜が入園する前年に、一人の園児がその林の中で行方不明になっっているらしい。

そんな事を言われても、園児の好奇心は抑えられなかった。

ある日、史美菜は当時の友人二人と共に、三人で雑木林の中に足を踏み入れる。

夏の終わりだったが、太陽が激しく照りつけるようなよく晴れた暑い日だった。それなのに魔女の森は暗く、足元はジメジメと湿っ

てひんやりとしていた。

木々の隙間は低い雑草で覆いつくされていたが、細い一本道が闇に続いていて、何日か前に雨が降ったせいか所々に小さな水溜りが残って枯葉が沈んでいる。

「ねえフミ、やっぱりやめよう」

「キョウちゃん怖いのか？」

「うん。怖いよ」

「平気だよ。魔女なんているわけないじゃん」

黒く湿った土を踏みしめて林の中を歩く。プリキュアのキャラが描かれたスニーカーの靴底から、土の冷たさが全身に染み渡る。

まだ十メートルほどしか進んでいないのに、既に見知らぬ世界に包まれた。振り返ると、木々の向こうはやたら遠く見えて白い光で輝いている。

右も左も黒々と茂った雑木で覆われていた。木々の間と低い雑草で向こうが見えそうなのに何も見えない。フミたちの背丈が低いせいもある。

見上げると、高々と茂った杉の重なる枝の隙間から、僅かに空が見える。

それは、遙か彼方に見えた。

三人の足取りはあつと言う間に重くなつて、前に進む事を拒んだ。光を遮るその先は、暗黒の見知らぬ世界に続いている。三人は足を踏み出せなかった。

バサバサツと、鳥が羽ばたいて木々を揺らした。

三人は思わず手を握り合つて身を寄せ合う。

「カア」という鳴き声。

「か、カラスだよ」

史美菜は頬を引き攣らせて無理に笑う。

「カラスって、悪魔の使いなんだよ」

今日子が不安げに眉を潜めた。

「何それ、知らないよ」

「フミ、オーメン知らないの？」

「おー麺？ 何それ？ 中華？」

史美菜は冗談を言ったつもりだったが、誰も笑わなかった。

三人は知らないうちに後ずさりしている。

背中から太陽の光を感じた。

ぽかぽかした暖かな陽差が、無性に懐かしい。もう林の出口はすぐ後に在る。

前方に見えるのは、ただ黒々と生い茂る木々とジメジメした冷たい世界。

三人は振り返って太陽の光を見ると、一斉にそれに向って走り出した。

あつと言う間に林を出ると、幼稚園の敷地に逃げ込む。園内の裏側には仕切りや柵は無いのだ。

「絶対なにかいるよ」

「いないよ。何かってなによ」

「魔女だよ」

「いないよ」

「フミだつて走って逃げてきたじゃん」

「みんなが走るからだよ」

しかし、史美菜の背中にも何だか知らないゾクゾクとした悪寒が走ったのは確かだった。

そして、何か変な臭いがした。

木々の臭いとは違う、湿った何かの臭いだった。それが何かは解らない。

史美菜は幼稚園の園門の前で遠くを見つめる。

白とオレンジで塗られた園舎の外壁は、最近塗り替えたらしい。

その向こうには、今も残る雑木林が変わらず小高い丘に続いていた。園門の前の通りは昔と違ってきれいに舗装され、道幅も広くなっ

ている。

史美菜はその通りに沿って自転車を走らせた。

魔女の森の終わりはどうなっているのだろうか。

当時、森の中を想像したりはしたけれど、終わりがどうなっているか考えなかった。

丘の向こうには何があるのだろう。

魔女の森を左手に見ながら暫く走ると、右手に小学校が見える。

ここは史美菜の通った学校ではない。隣の学区の小学校だ。

そこで彼女はふと気付く。

この小学校は美加が通っていた学校だ。小さな住宅街は途切れて、田畑に囲まれている。

……と言う事は、もしかして。

思ったとおり、もう暫く行くと何処かで見た瓦屋根の姿が見える。そして隣接した蔵の屋根。魔法陣を囲んだ蔵の屋根。

そこは美加の家の裏側だった。

左手に見える丘は、一番高い位置に来ている。

そしてちょうど美加の家の裏側からほんの数メートル先の位置に、神社の鳥居が見えた。

史美菜は自転車を止めて鳥居の向こう側を覗く。

両側が雑木で覆われた灰色の細い石段が、上に向かって続いていた。古びた階段の石の継ぎ目は凸凹して空間を歪ひずませて、その頂上にはもうひとつ鳥居が在るのが解る。

……神社が在ったんだ。

史美菜は丘の裏側を見る。

神社が在るらしいその向こう側は、切り崩されて住宅街になっていた。といっても、まだ分譲中らしく、ぼつりぼつりと綺麗な家が並んでいる。

遠くでカラスの鳴き声が聞こえた。

丘の上の雑木林の中だろうか。神社の敷地からだろうか。

そう高くない細い石段を見上げると、ほの暗いその向こうには

仙人でも住んでいそうだ。

魔女の森に仙人……史美菜は思わず自分の妄想におかしくなって独りで吹き出した。

しかし、いかにも人以外の何者かが潜んでいても不思議はないほど、そこはアヤシイ闇に包まれてひっそりと佇んでいる。

ゴツと風が巻き起こった。

史美菜は煽られる自転車を慌てて掴む。髪の毛が一方方向に強く引っぱられた。

突風が収まると、彼女は一度降りた自転車に再び乗り、そのまま来た道に戻って行った。

18・思惑

「先輩」

登校中そんな声の掛けられ方をするのは初めてだった。

高校に入ってから部活をしていない彼女は、後輩との繋がりはずいぶん多いのだ。しかもその声が男子のものだったから、余計に奇妙だった。

史美菜は怪訝な顔で振り返る。

「お久しぶりです」

背の高い学生が立っている。興南高校の制服とその風貌に彼女は一瞬誰だか認識できなかった。

「ああ、山下くん？」

中学の時の部活の後輩だ。

史美菜は中学の三年間卓球部にいた。地味なスポーツナンバーワンと噂されたその部は、珍しく男女の仲がよかった。

練習場所が無くて、男女一緒に体育館の片隅や空き教室、近くの公民館などを点々として交代で使用する活動だった為、自然に結束が強まったのだろう。

それにしても山下薫。彼は部内で背が一番小さく女子からも可愛がられていた。

それなのにいつの間に背が伸びたのか、今はどう見ても百八十センチくらいは在る。

小学生のようなつるりとした頬もニキビでイッパイで、女兒のようだった首は馬のように逞しい。

互いに自転車に乗っていても、彼女と山下の背丈の差は歴然だった。

「ずいぶん大きくなったね」

「ええ、去年急に延びて」

彼は今年興南に入学した一年生。史美菜とは二つ違いだ。だから、

中学の部活でも二年生ほど親しくしていたわけではないしそんなに話した事も無い。

それなのにわざわざ声をかけてくるのも、妙な気がした。

けっこう話をした同性の後輩さえ、高校では話した事も無い。

「何時もこの時間なんですか？」

「えっ？」

「学校に行く時間ですよ」

山下が笑う。

爽やか過ぎる。クリクリした坊主頭で笑う幼さの残る面影はないが、爽やかさはあの頃のままだ。

「え、ええ。そう……かな」

「俺、今日は朝練休みでたまたまなんすよ」

「部活？」

「ええ、卓球続けてます」

屋内スポーツらしい、色白の笑顔。

「先輩は？ 卓球辞めちゃったんですか？」

「アレは、女子高生がやる事じゃないでしょ」

「でも、南原も意外と強いですよね？」

「そうなの？」

全然興味が無いから、自分の高校の部活にも全く無頓着だった。

「知らないんですか？」

「うん。眼中になかったよ」

彼は史美菜の素の顔に、遠慮気味の笑顔を向ける。

横断歩道の信号が青になった。

「じゃあ。また会えるといいですね」

山下は自転車のペダルに足を乗せると、あっと言う間に加速して登校中の集団を超えて行つた。

美加は未だに入院して、百夏は日に日にケバくなって行く。
マニユキアだけでは飽き足らず、ネイルを着けて来た彼女は、今朝さすがに正門で教師に呼び止められたらしい。
集まる集団も、以前と違って何処かケババしい仲間に加わっている。

史美菜はあの魔法陣がもたらした物かは別として、周囲の変化を確かに感じ取っていた。

鉛色に沈む曇り空の重さは、今朝の意外な再会に弾む爽快感をかき消す。

放課後、史美菜は数日振りで汐泊孝樹に会い、バス停までの道のりを楽しむ。

何時雨が降ってもおかしくない空模様だったが、そんな事はどうでもよかった。

一本遅いバスで帰るといって、駅前のファーストフードでお茶をする。

「フミは彼氏とかいないの？」

「い、いないよ。そんなの」

「南原って、モテるだろ？」

「全然。制服の評判わるいし」

ちよつと謙遜かもしれない。制服の評判は悪いが、中身の評判は上々だ。

「でも、カワイイ娘多いよな」

面と向かってそんな事を言われるのは、非常に照れくさい。咄嗟にどう返していいのか判らなかった。

史美菜は緩む頬を絞って、コーラのストローに口を着けた。

帰り道、西の空は雲の切れ間が出来て太陽が覗いていた。薄つすらと彩る夕陽が雲をワイン色に染める。

学校を迂回するように国道まで来ると、直ぐ先に長身の姿が見えた。

「あ、先輩。奇遇ですね」

山下が笑う。

「今日はついてるなあ」

史美菜は信号待ちする彼の傍らに自転車を止めた。

「今、部活の帰り？」

「ええ。何時も帰りは今頃ですけど、陽が長くなっていいです」

そう言えばずいぶん陽が長くなったものだと、史美菜は改めて思った。

一緒に横断歩道を越えて、広い歩道を二列のままゆるゆると自転車を走らせる。

「先輩は、汐泊先輩と付き合ってるんですか？」

「えっ……な、なによ。急に」

史美菜は思わず自転車を揺らして蛇行した。

「時々一緒に帰ってたような……」

「なんで知ってるの？」

あまりひと目につかないように、近くの駅で待ち合わせている。

もちろん、全く目につかないのは不可能で周囲には興南と南原の生徒がうろついているのは確かだ。

「汐泊先輩は、平井百夏狙いのはずだったから……どうなのかなあ
って思っ」

史美菜は思わず自転車を止める。

「モモちゃん狙い？」

山下は彼女の動作に驚いて、それでも直ぐに自分の自転車も止めた。

「ええ、手紙は出してないようですけど」

『手紙を出す』というのは、例の忍び込みの事だ。

「なんで一年のアンタがそんな情報知ってるのよ」

史美菜は少しだけキツイ口調になる。

彼女の声の調子で山下は

「まずい事言っちゃいました？」と、ばつの悪そうな顔をする。

三年の汐泊の事を、一年の山下がきちんと知っているはずがない

……適当な噂に決まってる。

ちよつとモテぎみの生徒は、何かとやっかみ混じりの悪い噂を流される物だ。きつと山下もそれを聞いたに違いない。

きつとそうだ。ただ、それだけだ。

しかし、山下は再び口を開く。

「同じクラスに彼の後輩がいて……ほら、あそこの中学は少ないからけっこうみんな知り合いつていうか友達つていうか」

山下は史美菜の不安げな表情を読み取ったのか、少し声が小さくなった。

自転車を史美菜の真横に移動させる。

「それで、そいつ井上つていうんですけど……汐泊先輩はそのうち平井先輩を落とすそうで……そのキツカケを今掴んでるって……」

「キツカケって？」

史美菜は嫌な予感がした。

今日彼と交わした会話を自分本位で受け止めていたが、全てが他の意図に当てはまる。

キツカケって何？ そのキツカケって、あたし？

目当てはモモちゃんだったの？

山下はさらに声を小さくした。

「周りから攻め込むって……」

18・思惑（後書き）

ジャンルを『学園』に変更しました。

実際のどのジャンルに投稿するべきなのか、ずっと迷っています。

カテゴリーに『ファンタジー』があるので、それでいいのか……と（苦笑）。

19・高台

その後、山下と別れるまで何を話したのか覚えていなかった。別れ道で手を振った事は覚えている。

彼の心配そうな笑みも。

汐泊が自分に近づいたのは全て百夏に近づく為？ より確実に親しくなる為に周囲から攻め込む……

山下が囁いた声が、古いラジオの雑音のようにザラザラと頭の中を駆け巡る。

机の上に置いた魔法事典を手を取った。

パラパラと開く。

恋を实らせる呪文と、恋敵を消滅させる呪文が載っていた。

……消滅？

史美菜は頭を振って、事典を閉じる。

どっちにしても、最低三人で魔法陣を囲まなければだめだ。美加や百夏意外にこんなバカらしい遊びに付き合ってくれそうな連中はいないだろう。

その時携帯電話が鳴った。

『あ、先輩ですか？』

『ああ、山下くん……』

そういえば……別れ際携帯番号を訊かれて教えたのだ。どうして久しぶりに話した後輩なんか簡単に教えたのだろう。

たぶん……電話が欲しかったのだ。

汐泊の意図的な行動が発覚し、そして美加も百夏も今は話し相手にならない。だから、他の誰かの声を求めていたのだろう。

弱音か愚痴か気晴らしか。とにかく誰かと話しがしたかったのかもしれない。

『大丈夫ですか？』

『え？ 何が？』

『……だいぶ落ち込んでそうだったから……』

「そんな事ないよ。別にまだ付き合ってたわけじゃないんだし」

『そうですか。少し安心しました。余計な事言ってしまった気がして』

山下は短い沈黙の後に、囁くように言う『魔術でも使いますか？』

史美菜は自分の耳を疑った。

どうして彼から『魔術』などと言言葉が出るのか？

「な、なにそれ？」

『魔術で呪ってみましようか？』

「なにバカな事言ってるの？」

自分を慰める為におどけて冗談を言っているに違いない。

『俺……白魔術にハマってた事あるんです』

「白魔術？」

『はい。人を呪うのが黒魔術で、人を幸せに導くのが白魔術です。

だから、裏を返せば黒魔術の事も直ぐに解ると思います』

山下の声は真剣だった。

「もしかして、事典とか持ってる？」

バカバカしい……つい言ってしまった。

『知ってるんですか？ 事典の事』

「はあ？」

『魔術事典が存在するっていう噂を前に聞いたことがあって、ネットでも一時期かなり情報が流れてましたよ』

「そ、そう……」

そんなバカな……

持つてるなんて言えるわけが無い。それに、彼の言ってるのは『魔術事典』、美加に貸してもらったのは『魔法事典』だ。

似てるけど違う。

史美菜は自分の中で、そう決め付ける。頭に浮かんだ六芒星ろくぽうせいを慌ててかき消す。

桜木夙の陶器のような顔が蘇えた。作用と反作用……

「冗談でしょ？」

『ええ、まあ……』

山下は電話の向こうでクスリと笑う。

その後、二人は取り留めの無い話をして電話を切った。

何度か頬を揺らして笑った。

張り詰めた鬱な思いは何処かへいつていた。

別になんとも思っていないタダの後輩のはずなのに、異性との会話は何故か心癒される思いだった。

今日も母は何処かへ行っていない。

史美菜は今晚の夕飯はどうするのか？ などと考えながら、ベッドにゴロリと横たわった。

翌日史美菜は学校が終わると美加が入院している病院へ向った。

もう汐泊孝樹と会う気は起こらない。

念のため百夏を誘ってみたが、やっぱりつれない返事が返ってきた。

「ええつ、美加もそのうち退院するでしょ。今日はユカリたちと買物行くから……」

彼女はとりあえずといった笑顔を史美菜に見せて、放課後の教室を出て行った。

通学の時に何時も渡る国道を道に沿って南に向かう。

凪いだ風が、汐の匂いを運んでくる。

線路を越える為の高架を上る為、史美菜は立ち漕ぎをした。久しぶりだった。

しかし、半分上った所で諦めて自転車を降りる。

そろそろと自転車を押して歩く彼女の脇を、体力のある興南高校の男子生徒が二人通り過ぎて行った。

なんか、面倒くさい……

史美菜はどんどん先に行く男子生徒の背中を見ながらそう思ったが、とりあえず足は止めなかった。

高架橋のテッペンに来た時、港側の街が一望できた。霞んだ海に小さな船が見える。この距離で見えるという事は、実際は大型タンカーか貨物船だろう。

線路の向こうには行った事の無いコンビニが見える。その向こうに小さな公園。

振り返ると連なる民家の先に興南高校の校舎と、その向こうに南原女子高も見える。

興南の野球グラウンドだろうか、高いバックネットには『KYONAN HIGH SCHOOL』と大文字が掲げられていた。

あんなの着いてたんだ……

ふと風が気持ちよく感じた。

揺れる髪の毛が頬にかかって、その隙間から史美菜は少しの間見慣れない景色を眺めた。

20・屋上の影

史美菜は四人部屋の入り口を静かに入る。カーテンが半分閉められた窓から、午後の黄色い陽差がゆるく入り込んでいた。

確認するように部屋を見渡すと、手前右側のベッドの人は布団に包まってよく見えない。

左側には丸々肥ったオバサンが、半身を起こして点滴している。

史美菜は一瞬目が合って首だけで小さく会釈した。

奥の左はカーテンが閉められている。

あれかな？　と思っただが、右奥に寝ているのが美加だと気付いた。

史美菜はゆっくりと彼女のベッドに近づく。静かに眠っていた。

言い方は悪いが死んでいるように眠っている。

史美菜は思わず美加の鼻のそばに手のひらをかざした。

静かな息を肌で感じる……生きてる。

白く透き通る頬が、何時もより不健康に見えた。閉じた瞼は睫毛が長い。

よく見ると、ゆっくりだが胸元が上下に動いて呼吸しているのがわかった。

せっかく来たのだが、起こす気にはなれなかった。

どうして男を独り狙っただけでこんな……きつと魔法なんて使わなくても勇気を出せば、美加ならきつとゲット出来たはずなのに……

心に寒風が吹いた。

荒野を吹き抜けるような、荒れた砂で覆われた肌寒い風だ。それは心中で渦を巻いて、何処かへ飛んで行く。

これから美加はどうなるのだろう……不安が過る。

彼女の母親の話によると、白血球と赤血球の数がバラバラで、鉄分もかなり不足しているのだという。

貧血症にくわえ、吐き気などの症状があるらしい。

白く透き通る顔を見ていると、ふと過る。

このまま消えてしまふのではないか。美加は、明日になったら何事も、存在さえなかったように消えてしまふのではないか……？

五分くらいいただろうか。

顔を見ているのが、怖くなった。

病状を心配してではない。消えてしまいそうな美加の白さが怖かったのだ。

史美菜は小さな丸椅子に腰掛けて彼女を見つめていたが、すくつと立ち上がると病室を出た。

出て少し歩くとナースステーションがある。その角を曲がってエレベーターホールへ出ると、少女が立っていた。

桜木夙だ。

「何してるの？」

思わず声が出た。陶器のような白い頬は、まるで死神のようだ。

「美加さん、どうかと思って」

「あんた、死神？」

そんなバカな…… 史美菜は自分で自分の心に思わず言い返す。

「フミさんって、面白い事いますね」

不敵に笑う顔が、妙に似合う少女だった。

史美菜は夙に近づくと

「おかしくない？」

「何がですか？」 夙は史美菜の顔を覗く。

「男ひとり願っただけで、何で入院なの？」

「彼女は人をひとり殺しました」

夙は顔色ひとつ変えずに、小さな声で言った。

「何それ？ 美加がそんなことするわけ無いじゃん」

史美菜はまた一步、夙へ歩みを進める。

夙の身長はちょうど史美菜と同じくらいで、視線が微かに下に見えた。

「美加が、いくらなんでも人殺しをするわけ無いでしょ」

誰もいないエレベーターホールに、声が響く。

「ここじゃ……屋上行きませんか？」

夙は史美菜の横をすり抜けると、ホールの横から続く階段を上り始める。

「ちよ、ちよっと……」

史美菜は慌ててそれを追った。

廊下より少し薄暗い階段を、夙の後について上る。

六階を通り越してさらにその上に向う。

鉄の扉を抜けると、夙の黒髪が風に揺れた。

大きなシートがたくさん風にはためいている。バタバタと布がそよぐ音がした。

屋上全てが開放されているわけではなく、洗濯物を干したり出来る僅かなスペース（と言ってもかなり広いが）が、高い金網で囲われていた。

史美菜は、風に流れる自分の髪を横から押さえて

「で？ どういう事？ 美加が人を殺したって」

夙はゆっくりと振り返り、空を仰ぐ。

思わず史美菜もつられて空を見上げた。

西日に光る雲が、速いスピードでぐんぐん動いてゆく。

「緑町で起きた飛び降り自殺……」

夙が空に視線を向けたまま言う。

「緑町？」

史美菜はそれが、前に孝樹から聞いたあの場所だと直ぐに気付いた。

緑町という住所は知らないが、こんな田舎でそうそう自殺なんて起こらない。

「それが、美加の仕業だって言うの？ でも何の為に？」

「彼女の名前は峰津エミ。城之内剛彦の元カノなのです。いいえ、死ぬ寸前までカノジョでした」

史美菜は眉根にシワを寄せる。

「失恋で自殺したの？ でも確か、命は取り止めたんじゃない？」

「二日後に亡くなりました」

「それが全部、美加のせいなの？」

夙は空に向けた顔を下ろして、史美菜を見る。

「美加さんが呪文を使わなければ、カノジョは失恋しませんでした」

「でも……」

史美菜には上手い言い訳が浮かばない。言い返せない歯がゆさが、喉元に痞える。

「だから、美加さんはその反作用を受けるのです」

「なにそれ？　だって、そんなのおかしいじゃん」

「結果が全てです」

「そんな……」

史美菜はそう言いかけて、周囲の気配に気付いた。

屋上の高いフェンスの上に、カラスが並んで止まっている。次々に集まって来て、鉄のフレームにとまる。ほぼ満席だった。

陽差を受けた黒い影が、コンクリートの上でうごめいている。

気持ち悪い……

黒々とした縁取りは、各々に勝手な動きをしている。

真っ白なシーツは、夙の後ろでゆらゆらと揺れていた。

史美菜はそれ以上屋上に留まっている事ができず、先に鉄の扉をくぐって階段を駆け下りた。

美加が魔法の呪文で強引に獲得した男、城之内剛彦。その元カノが自殺した女性だった。

そんな事って在るのだろうか。

それじゃあ、美加はそのカノジョと同じ目に合うのだろうか……死んでしまうのだろうか？

反作用って、つまり呪いのようなもの？

帰りは再び国道の高架を越えなくてはならない。

緋色に変わり始めた空が、視線を埋め尽くす。

鳥の群れが、小さな塊となってそれを横切つてゆく。

歩道の柵の下は家々に明かりが灯つて、来た時とは別の風景が広がっていた。

窓の明かりは暖かく、どこか懐かしいのは何故だろう……線路沿いの路地にぽつりぽつりと街路灯が並んでいた。

頂上からは一直線にダウンヒルだ。

髪を靡かせ、スカートをひるがえしてペダルに乗せた足は動かす必要がない。薄暗い景色は、どれだけスカートが捲れても隠してくれるだろう。

細いタイヤが小さな凹凸でガタガタハンドルを揺らした。

20・屋上の影（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

ゆっくりですが、お話はちゃんと前に進んでおります（笑）。

21・静かなる我が家

国道を渡る何時もの横断歩道まで来ると、自転車を漕ぐ黒い影が見えた。ほぼ同時に横断歩道の袂に着く。

「あつ」

「あれ？ 何処か行つて来たんですか？」

山下だった。

「うん、ちよつと」

史美菜は話しながら髪の毛に手グシを入れる。前髪は横分けでピン止めしているので大丈夫だが、他は風を受けてもしかくしゃになつていた。

「この前より遅くない？」

「ええ。友達とムラケイに寄つてました」

ムラケイとは、学校近くにある文房具屋兼駄菓子屋で、運動部などの連中にはたまり場に持つてこいの場所だ。

もちろん、こういったレトロな店は、この辺りでも珍しくなつた。すぐ近くに高校が二つも並ぶ立地は好条件なのだろう。

信号が青に変わると、二人はどちらとも無く自転車を走らせる。

横断歩道を渡る間、史美菜は考えていた。

訊こうか、訊くまいか……口を開いた。

「ねえ、白魔術つて、効目あつた？」

史美菜は出来るだけさり気なく切り出すが、山下の視線は意外なものを見るようだった。

「どうですかね」

彼は曖昧に笑ってみせる。

「興味あります？」

史美菜は予想外の返しに、ちよつと戸惑つ。

「べ、別にないけど……」

「黒魔術やってみます？」

「どうせやるなら、白魔術がいいなあ」

しまった。何だか余計な事言ったかも。

「でもさ、ま、魔術事典で、本当にあるのかね」

取り繕うと思って、再び余計なことが口から出る。

山下がチラリと見た。

「俺、兄ちゃんから聞いたんですけど……昔、幼稚園の裏の雑木林で子供が行方不明になったらしいんですけど、その雑木林が魔女の森って言われたらしいんです」

史美菜が通っていた幼稚園の事だ。

そう言えば、山下の兄は自分のひとつ上と聞いていたから、あの神隠し事件の年にあの幼稚園に通っていたのだ。

山下は濃い眉を寄せて笑うと

「まあ、事典には関係ないでしょうけど」

少しだけ会話が途切れている間に、史美菜が曲がる通りへ来ていた。

史美菜はそのまま手を振る準備をしたが

「ねえ、白魔術って、呪いから救える？」

別の言葉が口から飛び出した。

「呪いって、なんすか？」

山下が自転車を止めた。

「いや、何でもない」

史美菜は笑って「じゃあね」と言って手を振った。

山下はキツネにでも摘まれたような顔のまま「はあ」と言っ तरीあえず小さな会釈をよこした。

史美菜が家に着くと、明かりは点いていなかった。
「またお母さん出かけてるんだ」

思わず呟いてカバンから玄関の鍵を取り出した。

鍵を差し込んでシンダーを廻すと、微かな回転負荷と同時に力チャリと軽やかな音がする。

訊き慣れた音だ。

そう言えば、最近母親の顔を見かけない。何日前からだろうか。何とか会の旅行はもう終わったと思うし、何か新しい習い事？

史美菜は慣れた光景に、たいした思案を巡らせないまま部屋へ戻る。

カバンを置いて、史美菜はふと思った。

美加が原因不明の重病なら、モモちゃんはどうなのだろう……何千万というお金が手に入った事に対する反作用がちょっとチャラくなっただけ？

髪を染めネイルを着け、最近スカートも以前より若干短い。

なにやら今まで付き合いのなかった連中とショッピングモールを徘徊しているらしい。

それだけ？　それが反作用によるモモちゃんに課せられた呪いのだろうか？

それとも、もともとモモチちゃんのお父さんが貸したお金が戻って来ただけだから、たいした願い事ではないのだろうか……

史美菜は昨日と同じように、台所へ下りると、父と二人で食べるであろう夕飯の仕度を始めた。

その夜遅く帰ってきた父は、晩御飯の後のお茶を啜りながら静かに言う。

いかにも切り出すタイミングを計っていたようだが、父と二人で和気藹々とした雰囲気もないので、意を決した感があった。

「お父さんたち、別れる事になるよ」

お父さんたち？　達ってなに？

史美菜は一瞬混乱して、父の湯飲みに継ぎ足そうと思って湯を満

たした急須の動きを止める。

この場でお父さんたちと言うのは、父と母のこと以外は無いだろう。

「お母さん?」

史美菜の問い掛けに、父親は「ああ」と小さく頷いて、やはり小さい声で「すまん」と言った。

22・崩壊

実感が無かった。母親は父親以上に留守が多いから、いなくても何も感じない。

こんなに家を空けるようになったのは、何時からだろう。

中二の頃にはもう、時折史美菜が夕飯の仕度をしていた気もする。高校に入ってから、父が帰りに何かを買ってきたり、出前を取ったりもした。父と母は不仲という感じはまったく無く、家族が揃えば笑みを交わしながら食卓を囲むのも当然で、共に満足した生活なのだと安堵していた。

史美菜自身、親がいなくてもお金を貰えば何とでも出来る年頃なので、両親が円満に見えれば家にいようがいまいが関係なかった。

しかし、突然伝えられた離婚。

夫婦の固定観念が崩れた瞬間だった。

離婚なんて物は、毎日絶えない夫婦喧嘩がもたらす険悪な状態から辿り着くものだと思っていた。

会えば笑顔を交わす夫婦には離婚などと言うものは、無縁だと思っていた。

ふと、芸能人の離婚会見で両者が笑みを交わしてる姿を思い出す。あの笑顔は、在る意味ホンモノなのだ。

互いに笑顔を交わして、別れる夫婦は実在する事を知った。

母親は外で新しい男をつくっていた。

交流の多い生活は、本人でも思いもかけない出会いと感情を生みつける事がある。

父親が言った言葉だ。

母親を責めるでも無く、彼は淡々とした口調で史美菜に理由を簡潔に話した。

成り行きは簡潔的だから、父親からはそう言う説明しか出来なかったのだろう。

史美菜は何故か仕方無い事のように理解した。
父親の事も母親の事も責める気持ちには沸かない。

それは彼女が大人なのではなく、現代じみたちよつと冷めた思考がもたらす奇形の感情かもしれない。

母は、自分の母ではなくなるのだと思うと、悲壮感よりもただ、不思議な感じがした。

自分を産み落とした他人の女になるのだ。

校舎から伸びる屋根つきの渡り廊下を渡って学食へサンドイッチを買いに行った帰り、史美菜は興南高校の敷地に孝樹の姿を見た。彼も彼女の姿を見つけて、低い金網越しにじつと史美菜を見ていた。

ここ数日、彼からのメールはシカトしている。

史美菜は視線をそらして、渡り廊下を歩き続けた。

「フミ、彼見てるじゃん」

後から声をかけてきたのは百夏だった。

容姿は大分変わったが、根本は変わらないと思った。

少なくとも、付き合いの長い史美菜は、そう思っていた。

「どう？ 彼とは上手くいつてる？」

百夏はいかにも無邪気に笑顔で言いながら、史美菜の変わりに孝樹に手を振って見せた。

孝樹はハツとして視線を逸らす、彼の周囲にいた連中が勘違いして、数人手を振り返す。

それを見て、史美菜は歩く足を速めた。

「どうしたの？ 喧嘩でもしたの？」

史美菜はとうとう堪えきれずに口を開く。

「孝樹は、もともとモモちゃんが好きなんだよ」

「うそ」

百夏が足を止める。

丁度校舎の廊下に入った所だった。

史美菜も足を止めて、百夏に振り返った。

「ウソじゃないよ。あたしに近づいたのはモモちゃんと親しいから。外堀から固める作戦だったんだよ」

百夏は深緑色の虹彩を瞬きさせると「じゃあ、あの事典使えばいいじゃん」

史美菜はギョツとした。

百夏は美加がどんな目に合っているのか、具体的に知らないのだ。今の彼女には、それを知ろうという気持ちが欠けている。

「そんなの、ヤダよ」

「なんで？」

美加の二の舞になるのは嫌……それは言い出せなかった。

「じゃあさ、フミは事典を使って、どっちが孝樹くんをゲットするか競争しようよ」

あまりに無邪気な言葉だった。

百夏のふつくらしたほんわかしたのん気な笑顔が、初めて憎たらしく感じた。

パンツと、廊下に音が響く。

後からガヤガヤお喋りをしながら歩いて来た二年生の集団が、声を切って静まり足を止めた。

考える暇は無かった。史美菜は百夏の頬を叩いていた。

平手を受けた百夏の顔が傾いて、茶色い髪が頬にバサリとくっついている。

彼女は何も言わなかった。

ゆつくりと自分の頬に手を当てると、床を見つめた。

「馬鹿なこと考えないでよ」

史美菜はそのまま踵を返し、廊下を走り出す。

教室へ帰れば再び百夏と顔を合わせる事になる。今はそれが耐え

られなかった。

モモちゃんは確かにのん気で一見大雑把だけど、人を思いやる気持ちは人一倍あった。

それなのに……

本当の彼女は何処かへ消えてしまったのだろうか。

生気が薄れてゆく美加を見るのも辛い、人間性が変わってゆく百夏の姿を見るのも辛かった。

史美菜は昇降口から外へ出ると体育館の隅に在る小さな切り株に腰掛けて昼食をとった。

しかし食欲は無く、調理パンを少し齧ったまま、ぼけつとする。ツバキの木にまばらに咲いた淡いピンクの花が、何だか悲しい色に見える。地面には、零れ落ちたように花の残骸が朽ちていた。

「彼女のお兄さん、家を出たんですって」

影が視界に映る地面にゆっくりと滑り込んできた。

聞き覚えのある静かな語り方に、史美菜は視線を上げる。

逆光にさらされた桜木夙が、黒々とした陰になって佇んでいた。

「お兄さん？」

「ええ、百夏さんのお兄さん」

「工場は？」

「再び軌道に乗って、従業員が五人入ったらいいですよ」

陰ってよく見えないが、夙が静かに笑うのは判った。

「もう我慢は必要ない。自由だ。そう言って、家を出たそうです」

史美菜は百夏が変わってしまった日の事を思い出した。

我慢しなくていい……それは、キャラメルブラウンの髪を揺らした彼女が最初に言った言葉だった。

「最近百夏さん、家に帰ってないみたいですよ」

「帰ってない？ て、じゃあ、何処から学校に通ってるの？」

「彼氏の家じゃないかしら」

夙は身体を移動して、顔の半分に光を当てる。

白い頬は、やはり陶器のように白く清楚だ。

「彼氏って？」

史美菜は疑問を次々に言葉にする。目の前の少女は、何でも知っているような気がした。

「さあ、それはよく知りませんが。独り暮らしの大学生じゃないですか？」

「大学生？」

「彼女の家は、どの道崩壊すると思いますよ」

夙の口角が微かに上がるのが見えた。

ゾツとするほどに、涼しげで惨忍な笑み。

史美菜が手に持っていた、半分齧ったコロツケパンのコロツケが、ポロリと地面に転がった。

23・光明への溜息

——もう嫌だ。どうして。あんな遊びひとつでどうしてこうなるの？

だいたい、あたしは何もやってないのに、ただ二人に協力してあそこに立っていただけなのにどうして？ どうしてあたしの親が離婚するの？

あの魔法事典はホンモノなの？ だから反作用が働いて呪いがかかってしまうの？ だいたい桜木夙って何者なの？

とにかく納得できない事ばかりで、史美菜は混乱した。頭の中に美加と百夏の変わり果てた姿と、自分の家の風景がぐるぐる廻る。

しかしヒステリックに混乱しても、周囲の状況は変わらないし紛れも無い事実なのだ。

放課後、自転車を押して校門を出た。ペダルを踏み込む気力が出ない。

とぼとぼ歩いて何時もの通りを歩く。

気に留めた事もないブロック塀のささくれた灰色が、妙に気持ち沈ませる。

コンビ二に集まっている南原と興南の生徒が見える。

何事も無く、みんな幸せそうだ。

なんの悩みも無く、ただ何となく日々を生きる若者……自分もその一人だったはずなのに、いつの間にかそうではなくなった。

美加も百夏も、もう三人で一緒に遊ぶ事は無いような気がした。

何か打開策はないのだろうか？

もし自分が魔法陣を使って、美加の健康を願ったらどうなるのだろうか。

そんな願いでも、やっぱり反作用の呪いがかかるのだろうか？

史美菜は誰もいない家の玄関を開けた。

母親はいないと決まっているから、もう何も考えなくていい。

今度はどここの会の旅行かとか、あのオバサン連中と出かけたのかとか、今夜は自分が夕飯の仕度をした方がいいのか、三人分作っておいた方がいいのか……そんな全てを何も考える必要が無くなった。

しかし、決まりきった不在は史美菜の心に微かな風穴を開けた。何時もいないのだから平気だと思っていたのに……

親がいなくても、何も感じない年齢に達したと思っていたのに……しかし、そうではない。

家族が減ったという事実、空虚な想いが沸き起こるのだ。

史美菜は階段を上って自室へ入ると、制服をベッドの上に脱ぎ捨てて着替えた。

机の前に腰掛けると、ぶ厚い事典が目に入る。

深い溜息と共にそれを手にとって、パラパラと捲った。

古木のような、干草のような奇妙な臭いに混じって、甘い香りが漂う。

彼女が探しているのは、魔法の効力を無くす方法だった。

しかし、自殺した彼女は戻っては来ないだろう。となると、もしそんな呪文があったとしても、美加に課せられた反作用の呪いは解けない。

でも、何でもいいから試してみたい。

美加や百夏に降りかかっている出来事が、ただの偶然だとしても……何もせずにはいられないのだ。

項目に対して説明や解説、心構えなどの文章が多すぎる。

それは「魔法の垂直構成」とか「水平構成」などと謳われていた。呪文の数はそう多くは無いのに、どうしてこう長々と綴る必要があるのか？

簡単に（注）って書いてくれればいいのに……

しかし、史美菜は一ページを丸々読んでみて解った。

『反作用は必ず起きる。叶った事柄が完成した直後から一生にかけて……その覚悟をもって魔術を執行しなくてはならない……何人なんびともそれを逃れる事はできない……』

——やっぱり……ちゃんと注意事項が書いてある。

それは、解説の最後の方に書いてあった。

取り返しはつかないのだろうか？

過ちを取り戻すには？

史美菜は目を皿のようにしてページの上に視線を滑らせる。

——ないの？ 一度使ったら、もうダメなの？

最後の項。

あとがきにあたる文字は、小さくて読みずらかった。

『黄泉の力に願いし魂を清める事が在るとすれば、白の魂を呼び起こせ。すべはティファレントの導きの元に……』

意味が解らない……

コレはつまり、白とは白魔術なのだろうか？ じゃあ、これはやはり黒魔術を使った魔法事典？ でも、天使の入る場所がティファレントなら、どうして呪文に出てくるのだろうか？

史美菜にはまったく理解できない。ただ、魔術を使ってしまった『魂』を清められる事は出来るようだ。

その方法が解らない。

ふと部屋の暗さに気付いた。机の電気スタンドで照らした外は、ほの暗さに包まれている。

史美菜は立ち上がって部屋の電気を点ける。明かりが灯った瞬間に、窓ガラスには部屋の全てが映っていた。

まるで、ガラスの向こうにもうひとつ世界があるようで、彼女は思わず自分に向って手を動かしてみる。

ガラスの向こうの自分は動かないのでは……自分と違う動きをするのではと思ったのだ。

しかしそんな事は無く、ガラスに映った史美菜は、紛れも無く中津川史美菜自身だった。

史美菜は入れてからずいぶん時間が経ち冷たくなった紅茶を口に
する。そして、ページを捲り文字を丁寧に見る。

あった。コレかも。

『処女の誠実な血をもって、魂を清めよ』

だ、だめジャン……

落胆した。

自分もそうだが、誰かに協力を願うとしても、実際思い当たらないのだ。

ウチのクラスにいないじゃん……

史美菜はページの端を指で摘んでヒラヒラさせると、深く溜息をついた。

それは希望の入り口に立ったのに出口が見えないような、安堵と
もどかしさが交錯する溜息だった。

24・尾行

夙……桜木夙はきつと……

史美菜の頭にふとあの白い頬が浮かび上がった。

彼女ならきつとまだしてなさそう。そういう事だ。

しかし、あの無表情な女がこんな事に協力してくれるだろうか。

それ以前に彼女は向こう側の人間……何故かそんな気がする。

そんな彼女が美加の為に願いの呪文を唱えてくれるとは思えなかった。

翌日から史美菜の学校での視線は変わっていた。

あの娘はどうか？ この一年生なら……『まだ』っぽい娘を探して、黒髪の清純そうな後輩などを見るとついつい目で追ってしまふ。しかし、いきなり魔法をやるうなんて言っても相手にされないだろう。

——困ったなあ。

「おはよう」

後から肩をたたかれて史美菜は振り返った。

「どうしたの？ こんなところでぼうつとして」

クラスメイトの東佐代里あずまこよりだった。

彼女は豊富な身体を揺らして笑った。

たぶんクラスで一番太っている彼女は、いったいどれだけのサイズがあるのか？ というウエストのスカートを履く。制服のサイズと言っのは実に幅が広く設定があるらしい。

彼女がいたじゃん。彼女なら『まだ』なのでは？

佐代里を見た瞬間、史美菜の今の興味はそれしかなかった。

「うつん。なんでも」

そう言っって自然に佐代里と歩き出す。

廊下を歩く間、史美菜は何度も彼女を横目でチラ見した。

丸々したほっぺはほんのりと紅くて、胸とお腹が歩く振動でぶよぶよと揺れる。明るい彼女の性格もあるのか、妙に憎めない姿に見える。

「ねえ、佐代里ってデートとか何処行く？」

史美菜は婉曲な質問から入る事にした。もちろん『そんな、デートなんてしたことないよ』という答を期待して。

「うん。その時によるけど、この辺遊園地とか無いから詰んないよね。でも、ちょっと遠いけど町田水族館は意外とアリだったなあ」
町田水族館とは、電車で十個ほど駅を越えた場所に古くから存在する県下唯一の水族館で、巷で知らない者はいない。

外観は古いが、中は新設された水槽などもあり意外と評判はいい。直ぐ近くにある丘の上はラブホが集結して価格も安い為、そっち面でも有名な場所である。

なにそれ？ 彼氏いるってこと？

佐代里は頬を揺らして笑うと

「なになに、フミ何処か行くとこ探してんの？」

「えっ、う、うん……まあ、ちょっと……」

「でもさ、あそこは覚悟決めてから行った方がいいよ。後でしらけるから」

「後でしらける？」

「だって、帰りは間違いなく丘廻りで帰るじゃん」

丘廻りとは、つまり帰りがホテルで休憩タイムという事だ。

「丘廻りで帰ったの？」

「まあ、あたしも別に拒絶するほどウブでもないし」

少しはウブになれよ……

「そ、そうか。そうだよな……ははっ……」

史美菜は苦笑しながら、心の中で落胆する。

どうなってるんだ最近の女子高生……

教室には二つ空き机がある。

斉野美加と平井百夏だった。

史美菜だって何時でも必ず二人と一緒にいたわけではないのに、そんな教室の風景はやっぱり何処か空虚で、それはたぶん他の連中よりも明らかに関わりを深く持つている証なのだろう。

休み時間は他の誰かと話して高い笑い声なども上げるが、授業中は逆に空いた机に目が行ってふと溜息を漏らしてしまったりする。

桜木夙は相変わらず、いるのかいないのか判らないほどの存在感で教室の隅にひっそりと佇んでいる。

誰にも関わらず、誰ともコミュニケーションしない彼女が、どうして史美菜には話しかけてくるのか？

何故、美加や百夏の現状を詳しく知っているのか？

それ以上に、魔法事典の事に何故詳しいのか？

夙に対しては疑問が多いものの、それにも増した気味の悪さが彼女への関わりを拒絶させるのだった。

放課後、史美菜はこっそりと夙の後をつける事にした。

昇降口を出た彼女を追って、史美菜は急いで駐輪場へ自転車を取りに行った。自転車を押して小走りに校門を抜けると、路地に夙の後姿を確認。そっと歩き出す。

彼女は美加の家の近所に越して来たらいいが、あの辺に新しい家はない。

もちろん、中古住宅とか貸家かもしれないが……とにかく史美菜は桜木夙の生態が気になりだしたのだ。

考えてみれば、美加とも夙の話しはした事が無い。

存在感がないから話題に出ないのだろうけれど、近所に住んでい

るなら以前にも時々見かけるとか、少々話題に出てもいいのでは？
だいたいどうして夙はこの通学距離を歩いているのだろう……普通なら絶対自転車で行き来する距離なのに。

一定の間隔を保ってゆつくりと自転車を押す史美菜は、夙の影を見失わないように歩いた。

背筋をピンと伸ばして凛々しく歩く夙は、後姿さえ影が薄く艶やかな黒髪だけが妙に風に揺れ、身体の方は今にも消えてしまいそうなだった。

25・うしろ姿

陽美菜は桜木夙を追っていた。

こつそり……といっても、国道沿いには身を隠す場所も少なく、自然に距離を開けなければならない。

姿勢を低くして自転車のハンドルを押すのが関の山だった。

距離をとって見る夙の後姿は、今にも消えそうなほど影が薄くて、黒髪だけがくつきりと風にはためいている。

時折髪をかき上げる姿は何故かノスタルジックで、髪なんて誰だってかき上げるのに彼女のそんな仕草は背景をモノクロームに変える。

路地を入れて少し行くと桜並木の堀沿いに出るのだが、そこもまた身を隠す場所は少なかった。

桜木夙の小さな後姿は、美加の家に入る手前の小さな橋を渡り、米の無人精米機所の陰に消えた。

史美菜は身を屈めたまま慌てて橋まで自転車を引きずって走る。乗ればいいのに、それに気付かないほど慌てていたのだ。

史美菜が無人精米所の所まで来ると、夙の姿は何処にもなかった。細い小道を跨げば美加の家の敷地に入る。

もちろん両隣にも民家はあるが、美加の家の敷地が広いので両隣までは大分距離があり見通しはいい。

史美菜は美加の家の前でキョロキョロと周囲を見渡すと、目をしばたかせた。

彼女は何処へ消えたのか？

「あら、フミちゃん。どうしたの？」

少し先でビニールハウスから出て来たのは、美加の母親だった。

美加の家の敷地は入ってすぐ右手にビニールハウスと小さな畑。

左側にはキャベツ畑が広がって、その間を通って奥まで歩くとようやく家屋とあの蔵が在るのだ。

「あ、おばさん」

史美菜はとつさの事で、何を言おうか迷ったが

「美加の具合、どうですか？」自然と口が動いた。

日頃から彼女の容態を気に掛けているからだろう。

「ああ……どうも具合がよくなって……原因も判らないから治療も上手くできないのよ」

原因は解っている……たぶん。

「そ、そうですか……」

「わざわざ様子を訊きに？」

小さい花柄のエプロンを着けた美加の母親は、史美菜の方へ近づいて来た。

「え、ええ。なんだか気になって」

苦し紛れに適当に返事をする。

その間も、史美菜は視線を辺りに巡らせていた。

夙は何処へ行ったのだろう……史美菜の頭にはそれしかなかった。

「そう言えば、裏の神社って昔からあるんですか？」

史美菜は間が持たないついでに、ほんの少しだけ気になっていた事を思い出す。

「ああ、あそこはあたしが嫁いできた時にはもう大分寂れていたよ。お婆ちゃんが若い頃から在るって聞いたから」

「お婆ちゃん？」

「美加のお婆ちゃんね」

美加の母親は、そう言ってから意味深にフツツと笑いを漏らした。史美菜が不審な顔でそれを見ると

「ああ、ごめんなさいね。いえね、お婆ちゃんが若い頃にあの神社で魔女にあつたなんて言ってたのを思い出して」

美加の母親はこらえ切れないと言つか、恥かしさを隠すようにアハハと声を出して笑う。

「神社に魔女なんてね。河童とかならわかるけど」

「河童？」

史美菜にしてみれば、どちらも変だ。

「魔女がいたんですか？」

「昔の人はほら、色んなものを見るからね。天狗とか」

美加のお婆ちゃん、つまり美加の母親の義理母は高校生の頃夕暮れの神社の境内でくたびれた魔女に会い、魔法の事典を買ったそう
だ。

「魔法の事典って、お婆ちゃんが貰ったものなんですか？」

「えっ？」

史美菜は自分の言葉に驚いた美加の母親に向って

「あ、いいえ。なんでも……」かぶりを振った。

「それで？」

「はあ？」

美加の母親は気の抜けた声を出す。

「それで、お婆ちゃんは魔法事典をどうしたんですか？」

「さあね。焚き木にしてお芋でも焼いたんじゃない」

美加の母親は、そう言っ
て日に焼けた顔をクシャクシャにして再び声をたてて笑う。

「なんか面白そうな話ですね。お婆さんは今も？」

「三年前に亡くなってね」

史美菜は心の中で落胆した。

そのお婆ちゃんが生きていれば、魔法事典の事を詳しく訊けたのに……

少しだけ風が吹いてきた。

よく見ると、蔵の瓦屋根の向こうにはあの丘が見える。

ただの雑木林だと思っていたが、木々の合間に微か上の鳥居が見えた。

幼稚園の裏から続く魔女の森の終点地。

あんなところに魔女がいたんだろうか……

「せっかくだし、お茶でも飲んでいく？」

遠くを見つめる史美菜に、美加の母親は愛想よく声をかけた。

「あ、いいえ。もう帰ります」

史美菜はそう言って小さく会釈をすると、美加の母親に背を向けて歩き出した。

26・反発

土曜日の朝は、家の静けさが身に沁みる。

学校へ行く平日は自分自身がバタバタしているからほとんどそれを感じないのだが、土曜日の朝起きて、学校へ行く時間が過ぎる頃家の静けさが家屋の空気を満たすのだ。

母親のいない家。

以前も頻繁に出かけていた母親ではあったが、家の何処かには存在の名残が何時もあった。それが無いのは、母親が二度と戻ってこない事を実感させた。

家のあちらこちらに残る、彼女の残骸は名残や気配ではなく、ただ空虚な爪跡でしかない。

父親は出来るだけ早く帰ってきて史美菜と一緒に夕食を食べるようになったが、彼女にしてみれば父親と二人で食べる食事はどうにも間が持たず、どうせなら一人の方が気楽に思う。

会社が休みの日はさり気なく家にいて読書などをしている背中を目にするが、それもやはり空虚な光景だ。

だから史美菜は父親の背中へ話しかけたりはしない。

それでもやつぱり、土曜日の朝はなんだか寂しくて、しんと静まる家屋の空気が切ない。

史美菜はそんな世界で一人きりのような空気を払いのけると、台所で目玉焼きを焼いて朝食の仕度をして、トーストを齧った。

まるで一人暮らしを満喫する気ままな大学生のように。

台所の窓からは隣の家のカーポートが見える。

アルミの骨組みに半透明なグラスファイバーの屋根を取り付けたお手軽屋根付きガレージだ。

その車庫のアルミの柱の向こうに彼女はふと人影を見た。トーストを齧ったまま史美菜は思わず硬直する。

直ぐに窓際に張り付いて、通り側を覗く。

フラフラとアヤシイ素振りで行く人影は間違いなく見覚えのある風貌だった。

史美菜はトーストを加えたままりビングへ行くと、カーテンの陰に隠れて庭の先を見る。

中津川家の庭は低いブロック塀と僅かな庭木で囲まれていた。

その低い塀からひよこひよここと頭を覗かせている男がいる。さつき史美菜が台所から見た人物と同じだった。

なに？ 何やってんの、アイツ。

史美菜は少しの間カーテンの陰から、塀越しに見え隠れする知った顔を見ていたが、啞えたトーストがふやけて来てハツと我に帰る。彼女はリビングのテーブルにティッシュを一枚敷くと、食べかけのトーストをそこへ置いて玄関へ向った。

玄関ドアを開けると

「ちよつと、何やってるの？ 孝樹」

史美菜の家をひよこひよこ覗き込んでいたのは汐泊孝樹きくみだった。彼はいきなり玄関ドアを開けた史美菜の声に驚いて、思わず直立する。

史美菜はサンダルを引つ掛けると、玄関を出て庭木を隔てて彼に近づいた。

「何？ なんか用なわけ？」

以前の明るく可愛げな声は出さない。

彼女は無理にそんな態度を孝樹に向けた。

「いや……最近どうしてるかと思ってさ」

孝樹のちよつと情けない苦笑が、史美菜の心をチクリとくすぐると、思わず頬が熱くなった。

首の上だけがふわりと浮き上がる感じで、ファンデを塗っていないオデコの痣痕が微かに紅く浮き出る。

「ウチ知ってたの？」

史美菜は横分けた前髪に手を触れた。

顔が火照ると、痣が浮き出る事をよく承知しているから。

「いや……人伝に訊いて、それで三日かかったよ」

孝樹はそう言って少し照れながら無邪気に笑う。

この前の事で負い目があるのか、やっぱり少し情けない笑い。

「あたし、今はモモちゃんと一緒にいないから近づいても無駄よ」

史美菜の声が、何時に無く低くなる。妙に冷静に言葉が出た。

心の中で自分を落ち着かせると、顔の火照りも何処かへ飛んで行った。

「ああ……やっぱりその事か。確かに最初は……ほんとに最初だけ、その頃は平井が目当てだったのは確かなんだよ」

やっぱり本当だったんだ。僅かでも違うと思っていた希望が絶たれ、史美菜は彼を一瞬睨むように見る。

「いや、でもさ。フミと一緒に帰るようになったら、何だかフミの方がよくなっただっていうか」

「それってさ、アンタが浮気性っていう証拠でしょ」

孝樹の言い訳に、史美菜は納得しない。

「確かに俺、ちょっと浮気性だけどさ……でも……」

「帰ってくれ」

史美菜は彼の言葉を遮った。最後まで聞くになれない。

もし、最後まで聞いてしまつて、それに納得して、その後どうすると言うのだろう。告白されて付き合う？ まさか。

史美菜は一瞬でそんな事を考えると、彼の言葉を聞く気になれなかった。

「いや、ちょっと聞いてくれよ」

「お父さんいるんだよ。呼ぼうか？」

「判ったよ。今は、帰るけど……」

孝樹はそう言つてうな垂れた首を通りへ向けた。

史美菜はちよつとだけ罪悪感に苛まれるが、何であたしが……と、被害者の自分を思い出して頭を振った。

孝樹の頭は通りに沿つて、どんどん離れて見えなくなった。

史美菜は何だか奇妙な疲労感に襲われて、長い息をつくと玄関に

入った。

家の中に戻った史美菜は、リビングに置いた冷たいトーストを手にとって台所へ行くと、冷めた目玉焼きを口にする。
テーブルに置いた携帯電話は寂しく沈黙していた。

27・寂しい影

日曜日、史美菜は久しぶりにショッピングモールへ出かける。家の日用品が切れているものは彼女が買わなくてはいけない。

もちろん、お金は昨晚父親に貰ってきたがこうしてよくよく考えれば、何時でも切れずにあつたティッシュペーパーや洗剤は母親が絶えず買っていたのだ。

史美菜は慣れない日用品のコーナーをウロウロしながら、買い物カゴへ必要なモノを放り込む。

よく来ているショッピングモールだが、初めて通る通路ばかりだ。本当に必要か解らない大きなカートを押した人混みが自分勝手うごめいて、そこで通路を塞ぐ。その度に迂回をしいられた。

バタバタしながらひと通り買い物を終えるとお金が充分余つたので、史美菜はファッションモールをぶらぶらする。

両手には世帯染みた主婦のように、買い物の手提げをぶら下げたままだが。

日曜とあつて、何処から出てくるのか腕を組んで身体を密着させたラブラブなカップルが多い。

彼女は下着専門店のディスプレイに飾られた夏向け最新見せブラを見つめながらその場を横切つて、その隣のレディースショップに入る。

そろそろ新しい半袖が欲しくなる時期だった。

すると、通路から聞き覚えの在る声が聞こえた。

少しおっとりした甘ったるい声。それは、史美菜が知っているよりもずっとゆったりと濃厚な甘さを含んでいた。

振り返ると、店頭の大きな通路を百夏が男と歩いている。

史美菜は思わず什器の陰に隠れてそれを見送った。

声をかけるべきだったかもしれない。

学校においでよ。と、少しは言うべきだと思いつながらも、それを

言いに彼女の傍へ行く勇気が出なかった。

見知らぬ連れの男は、どう見ても社会人だったから、なんだか百夏が自分と同級生だとは思えなかった。

百夏までもが、顔は知っているが面識の無い年上の娘のように史美菜には映っていた。

史美菜は家に帰ると、ダメ元で百夏にメールを送ることにした。
できるだけさり気なく。

『久しぶり～。元気？ 何してた？』
できるだけさり気なく……

史美菜が携帯を閉じて、買ってきた物を台所のテーブルブルに広げていると、携帯に着信が来た。

急いで携帯を開いて見ると、百夏からの返信だ。

『元気だよ。ちょっと会わない？』
どういう事だろう。

史美菜は首をかしげた。

さっき見た時には彼とラブラブで歩いていたのに、今もう彼女は独りなのだろうか。彼の家には行かないのだろうか？

それとも、さっきモールで見たのは、人違いだったのだろうか。

史美菜は早速返信して、家の近所の公園で会うことにした。百夏が近くまで来ると言うのだ。

買い物や行楽地の帰りなのか、大通りは何時もより車が多く行きかって信号待ちでは列を成している。

史美菜の家から大通りに出てちよつとだけ学校とは反対に行くと、少し路地を入った場所に小さな児童公園がある。

鉄棒と砂場しかない、いかにも殺風景な公園だ。以前はブランコとスベリ台が在ったのだが、各地で起こる公園の遊具による怪我が問題となって取り外されたのだ。

なんだか寂しいというか、マヌケな姿だ。

史美菜が待ち合わせの時間に公園へ行くと、百夏は既に来ていた。
「久しぶり」

史美菜の姿を見た百夏は、マスカラで真っ黒な目で笑い、街灯の光に照らされて無邪気に手を振った。

動作は以前と変わらないままの百夏だった。

彼女の服装はヤッパリ史美菜がモールで見かけた姿で、見間違いでな無いのだと独りで納得する。

二人はベンチに腰掛けて少しの間他愛無い言葉を交わした。

「ていうかさ、フミのお母さんって、出て行っちゃったの？」

百夏が何処から聞いたらしく、少し気の毒そうに言う。最近学校に來ないわりには、そんな情報は伝わるだ。

たぶん、クラスのケバイ連中とは放課後とかに会っているのかも
しれない。

「うん……まあね」

「大変だよな」

「そんな事も無いよ。元々お母さんは出歩くのが好きで、家にあんまりいなかったから」

「そう……よかった、フミが元気で」

百夏はそう言って笑う。

史美菜は百夏が以前の優しさを残している事に安堵した。
しかしその後百夏は「ねえ、今夜泊めてくれないかな」

「えっ？」

「フミの家に、泊めて」

史美菜はイマひとつ事態が飲み込めない。

「な、なんで？」

「彼氏と喧嘩してさ、ムカツクから今晚行くところなくて」

「家、帰れば？」

史美菜は遠慮気味に苦笑する。しかし、その言葉は彼女の本心だった。

「嫌だよ」

百夏は即答して、茶色い髪の毛を手で遊ぶ。

「なんで？ モモちゃん全然家に帰ってないんでしょ？ そろそろ帰った方がいいよ」

「ヤダ。じゃあ、他あたる」

「他って？」

「他の誰か。男なら泊めてくれるし」

そう言っただけでベンチから立ち上がった百夏を追うように、史美菜も立ち上がる。

「ちょっと、何考えてんの？」

史美菜は百夏の腕を掴んだ。

「どうして急にそんな投げやりなの？ もっと自分を大事にしようよ。ね」

「別に投げやりになってないよ。それに、自分を大事につて、なに？」

百夏の冷たい視線を、史美菜は初めて見た。

「だ、だから。ちゃんとしよう。ちゃんと学校来てさ……」

「ちゃんとして、なによ。あたしはちゃんとしてきたよ。ずっとずっと、アンタが男と付き合ってる時も、ずっとちゃんとしてたよ」

百夏の声に、史美菜は思わずたじろいだ。

コレはリバウンド？　ずっと真面目に頑張ったが為の跳ね返りなのだろうか……

確かに百夏は何時も真面目だった。

中学の時に史美菜が男の子と一緒に帰る時、百夏は寂しく離れて歩きながら二人の背中を見ていた。

百夏と史美菜の家は国道を挟んで一見離れているが、中学の学区は一緒に途中までの通学路が一緒だったのだ。

百夏の住んでいる地区から一番近い中学が、史美菜の通う中学だったと言ってもいいかもしれない。

「フミは何時だれと初体験した？」

「な、なによ急に……」

史美菜は瞬きをして百夏を見つめた。

西に傾いた陽光が少し眩しくて目を細める。

気付けば二人の影が、雑草の生えた公園の荒れた地面に長く伸びている。

「あたしはお兄ちゃんだったよ……」

百夏の言葉に史美菜は驚愕を隠せなかった。

僅かに開いたままの口から「えっ？」と変な声が漏れた。
眉が歪んで、笑顔が作れなかった。

28・遠のく背中

百夏の初体験は近親相姦だった。

その後も、二人の関係はしばしばあったのだという。

兄が家を出てゆくまで。

史美菜は百夏が経験済みなのは何となくわかっていたが、まさか相手が実の兄だとは思ってもみない。

そんなのは安っぽい漫画やドラマだけの話しだと思っていた。

「だからあたしは、これから自由に生きるんだ」

百夏は薄っすらと笑いを浮かべて背中に注ぐ西日に向って振り返る。

ゆっくりと歩き出す百夏を史美菜は追って、再び腕を掴んだ。

「それでも、学校に来なよ。家に帰りなよ」

「もう、お父さんもお母さんもどうでもいいのよ」

百夏は史美菜の手を振り払って駆け出した。

公園の柵の間を抜けて通りに出ると、大通りの歩道に向って走り出す。

公園と大通りの間には小さな酒屋兼タバコ屋がある。史美菜は百夏を追ってタバコ屋の横を駆けた。

厚底サンダルを履く百夏の駆け足は思いの外は速くて、史美菜は焦って追いつくのに必死だった。

一度腕を掴むが振り切られる。

大通りの歩道に出た時、史美菜は再び百夏の腕を掴む。今度は強く掴んだ。

しかし、百夏はそれを駆けながら強く引き離そうとした。

「離してよ」

「ダメだよ、モモちゃんダメだよ」

走っていた勢いを残しながら二人は絡み合うように歩道を斜めに移動して、小さな銀杏の植え木の所で百夏が力強く史美菜の手を引

き払う。

夢中で史美菜を振り切ろうとしていた百夏は、史美菜の手が離れた反動もあって、身体を銀杏の細い幹にぶつけて倒れこんだ。

車道側に……

「あっ！」

史美菜は振り払われた手を再び差し出すが、とうてい間に合わなかった。

微かな夕闇に、行き交う車のほとんどはヘッドライトを点灯していた。

急ブレーキの音がした。

どれだけアンチロックの進んだブレーキでも避けられる距離ではなかっただろう。

眩しいヘッドライトが、けたたましいブレーキの叫びの中で、百夏の身体を軽く跳ね上げた。

本当に軽く。

百夏の身体は、いとも簡単に宙に浮いたのだ。

ドサツと生々しい音がアスファルトを震わせると、彼女はその場にグニヤリと横たわった。

「嫌嗚呼！」

史美菜は届かない手を差し出したまま、ただ叫んでいた。

「モモちゃん、モモちゃん！」

史美菜は歩道から、車道に横たわる百夏に声を掛ける。

グツタリと横たわる友人に、怖くて触れられない。

車の運転手が慌ててドアを開けると、百夏の姿を見て震えながら携帯電話を手にした。

車道のアスファルトに、夕陽に照らせた血溜まりがきらきらと広

がつてゆく。

史美菜は足がすくんで動けなかった。

「何してんだよ、お前ら」

背中から声をかけてきたのは、汐泊孝樹だった。

「モモちゃんが……モモちゃんが……」

涙で頬をどろどろにして、史美菜はそれしか言えなかった。

孝樹は運転手が警察と救急車を呼んでいるのを確認すると、百夏に近づいた。

頭から血が流れている。

彼は頭を揺らさないように気をつけながら、自分のポケットから出した紺色のバンダナを彼女の頭にあてがった。

素人が触れられるのは、それが精一杯だと思った。

間も無くして救急車と警察の事故処理車が到着する。

史美菜と一緒に孝樹も救急車に乗り込んで病院へ向った。

それほど応急処置をするわけでもなく、ただストレッチャーに横たわる百夏と乗る救急車は、やけにゆっくり走っているような気がした。

悲鳴のようなサイレンだけが、鼓膜を突き破って頭の中を埋め尽くす。

孝樹が史美菜の顔に視線を送っている。

史美菜は彼の視線が自分の額に向けられている事を悟って、涙を拭う手を額に移し乱れた前髪を指で直した。

「お前も何処かにぶつけたのか？」

額の痣跡が紅く浮き出ていたのだろう。

「うつん。違う」

史美菜は鼻をすすりながら応える。

「でも、オデコが少し……」

「コレは前からよ。ずっと前からなの」

史美菜がそう言って再び自分の額に手をそえると、孝樹はそれ以上何も言わなかった。

救急病院へ搬送されてストレッチャーを慌しく運んで行くと、史美菜と孝樹はロビーに残された。

外来診療の終えた病院ロビーは物静かで、二人の息使いだけが時間の針に絡みつく。

「なんで？ どうしてこんな事に……」

史美菜は鼻の詰った声で呟く。

「大丈夫さ。血圧もそんなに低下してなかったし、大丈夫だよ」

孝樹は史美菜にそっと触れる。

「ていうか、なんでアンタがいるの？」

史美菜は涙目で彼を見上げた。

「いや、つい一緒に乗っちゃって」

孝樹が髪の毛をかき上げる。

「違う」

「は？」

「どうしてあの場にいたの？」

「えっ？ いや、それは……」

孝樹は昨日に引き続き再び史美菜の家に行こうとして途中で彼女の姿を見かけたらしい。こっそり後をつけると、あの公園で百夏と会っていたと言うわけだ。

「じゃあ、ずっと見てたの？」

「いや、ずっとつてわけじゃ。あの通りから出てくると思って、酒屋の自販機でジュース飲んだよ」

孝樹が気を抜いてジュースを飲んで、待ちくたびれて空き缶をゴミ箱に入れていたら史美菜と百夏が路地から駆けて来て揉み合っていたのだそうだ。

「どうしてモモちゃんを止めてくれなかったの？」

史美菜は恨めしそうに孝樹を睨む。

「とっさの事で、そんな事できなかったよ」

史美菜も自分勝手な言い方に気付いて思わず「そくだよね……」
「めん」

彼女は誰もいないロビーに並ぶ椅子の群れの二画に、ポツリと腰掛けた。

「何があつたんだ？ あんなにもめてさ」

孝樹も彼女の隣に腰掛けた「やっぱ、俺が悪かったのかな……」
「ちがう。そうじゃないよ」

史美菜は簡単に、最近の百夏の事を話した。もちろん、近親相姦の事や魔法事典の話はしない。

しかし史美菜はこうしている場合で無い事に気付いた。

魔法の効果を中和しなければならぬ。

もしかしたら、このままでは二人共死んでしまつかもしれない。

暫くすると百夏の両親が来たので、史美菜は簡単な状況説明だけすると病院から駆け出した。

「ちょ、おい」

孝樹は急に走り出した史美菜の背中を、呆然と眺めていた。

追いかける資格が自分には無い事を悟っていた。

29・生け贄

魔法陣と呪文……それだけではダメだ。

誰を、誰に頼めばいいのだろう。

誰かに頼まなければ。なんとかしなければ。

史美菜が家に帰ると、父親はまだ帰っていない。会社の付き合いだと言っていたが、どうだか解ったものではない。

史美菜は病院を出たはいいが歩いて帰る事ができない事に気付いて途中でタクシーを拾った。

父親から貰ったお金が多めに財布に残っていたので助かった。

暗い玄関に向って門扉を開けると、ふと人の気配。振り返ると暗闇に夙が立っていた。

月明かりもないのに、白い頬がボウツと浮かび上がっている。周囲の家の窓明かりが微かに届いているのだろうか。

「大変な事になりましたね」

無表情にポツリと言った。

史美菜は夙に歩み寄ると徐に肩を掴んで

「いったいなんなの？ あたしの友達を二人共奪うの？ あたしは独りぼっちだよ。魔法のせいで独りぼっちだよ。あたしは何も願ってないのに」

「あたしにはわかりません。情報を少し知っているだけですから」
暗がりの中に浮かぶ夙の白い顔が、無表情に口を動かす。まるでからくり人形のように。

「ねえ、あんた何処まであの魔法の事を知ってるの？ あの魔法の効果で中和するにはどうすればいいの？ 処女を殺して生き血をさげないとダメなの？」

白い頬が微かに笑った。

夙の唇は妙に色が薄かった。

唇の色が無いから、コントラストの関係で顔全体が陶器の造りモ

ノのような白色に感じるのかもしれない。

「あたし、処女です」

やっぱり……ていうか、それでどうするの？

唐突な夙の発言に、史美菜は藁をも掴みたい気持ちを前面に押し出す。

「生贄になつてくれる？」

「生贄とか、そんな物騒な事ではないですよ」

「じゃあ、協力してくれる？ あたしに協力して！」

夙は黙って小さく頷いた。

あまりの素直な要求の受け入れに史美菜はいささか拍子抜けするが
「ああ、でも人がたりない。魔法陣に立つのは最低三人、あんたを入れても一人たりないよ」

史美菜はイライラして、地団駄を踏む。

「あたしは魔法陣の中央に立つから、人数には入りませんよ」

「ええ？ そうなの。じゃあ、あと二人必要じゃん」

「鏡」夙がポツリと呟く。

「鏡？」

「そうです。鏡を使えば、あなた一人でも三人になります」

「あたしの姿を鏡で映せばいいの？ それで人数分の代用になるの？」

夙は再び頷く。

そんな裏技があるのか？ ていうか、夙は何故そんな事まで知っているのだろう。

「でも、そんな大きな姿見二つもないよ」

「蔵の奥、本棚の隙間にあります」

「なんで？ なんでそんな事知ってるの？ あんた誰なの？ 何処から来たの？」

史美菜は沸き起こる疑問を連射の如く吐き出すが……

「行きましょ。時間がないです」

夙は構わず歩き出す。

「時間って？」史美菜も彼女を追うように歩き出した。

「美加さんが、危篤です」

「えっ？」

史美菜は歩き出した足を止める。

美加の顔が浮かんだ。真っ白で透き通るような病室での寝顔が脳裏に蘇える。白く透き通って薄れ、ベッドに敷かれたシーツの色と同化した。

それは死と言うよりも、消えてなくなる。何もなくなる感じた。

凧は振り返らずに史美菜に背を向けたまま

「だから、今は美加さんの家に誰もいませんから」

「いや、でも美加が……」

「魔法の効果を中和させればいいだけですよね。そうすればきっと、美加さんは無事です」

「ああ……そ、そうか」

史美菜は凧の背中に向って頷くと「あ、ちょっとまって」

駆け足で家に戻り部屋へ駆け上がると魔法事典を掴んで外へ出る。自転車を乗り出して門を出た。

「乗って」

凧を後の荷台に乗せると、そのままペダルを踏んで走り出す。

大通りはもう交通量がだいぶ減っていた。横断歩道を横切って、美加の家に向かって風を切る。

二人乗りしてもっとと負荷が大きいと思っていたが、後ろの凧は異常に軽くまったく重さを感じない。

それに、日曜日なのにどうして彼女は制服姿なのか……？

史美菜はいろんな疑問が湧いて出る思考をかき消す。今となってはそんな事、考えてもしかたない。

「お母さん、戻って来るといいですね」

後ろで凧が囁いた。風のような小さな声だった。

「知ってたの？」

「はい……」

史美菜は月のない夜空をちょっとだけ仰いで小さく笑うと

「どうだろう。なんか、無理だと思う」

夙は何も応えなかった。

「あんたは？ どこに住んでるの？」

史美菜はチラリと後を振り返って、直ぐに前を向いた。

ゴツと音を立てて、車道を走る車が追い越してゆく。

左向きに横乗りした夙の伸ばした指先が、史美菜の視界に微かに入る。夙が華奢でか細い腕を伸ばし、遠くを指差していた。

「何？」 史美菜が振り返る。

夙は何も言わなかった。

そして、延ばした指を下ろした。

史美菜は少しの間彼女が指した方角に目を凝らしていたが、僅かな家並の向こうは漆黒の闇があるだけだった。

カアと、どこかで鳴いた気がした。

小さな国道沿いの街路灯が幾つか過ぎたところで路地に入る。

桜並木の堀の横を駆け抜けて、橋向こうは別世界のような暗がりだった。無人精米機の機械だけが、ぼんやりと明かりを放っている。

微かに見える景色と記憶を頼りに美加の家の敷地を進んで、蔵の前に辿り着いた。

黒々と佇む夜の蔵は、昼間に見るよりずっと大きく見えた。

史美菜が自転車を降りると、夙はもう蔵の入り口にいた。自転車のカゴから事典を掴むと小脇に抱えて蔵の入り口へ駆ける。

鉄の扉には鍵はかかっていなくて、ギギッと錆びついた音と僅かな負荷で開くことができた。

静まった冷たい空気が、微かな埃の匂いに混じって外へ流れ出る。何も無い闇だけが何処までも続いている気がした。

史美菜は僅かな記憶をたよりに、手探りで明かりのスイッチを探すと意外と触れやすい場所にそれはあった。

闇が消えて、蔵の中は明かりに包まれる。

史美菜は自分の後ろに夙がいることを確認すると、二階部分へ続

く梯子に歩み寄って手を掛ける。

なんだか気配が無くて、いるのかいないのか目で確認したくなる。梯子が以前よりも、高く感じた。山吹色の明かりが、天井を高々と見せるかもしれない。

史美菜が二階にあがると、あの時の魔法陣はまだそのままに残っていた。

小麦粉で描いたあの魔法陣だ。

「鏡はどこ？」

史美菜が振り返ると、夙は無言で指をさした。古びた本棚の後ろを覗くと、暗くてよく見えないが確かに何かがある。

史美菜は指を立ててそれを引き出した。

途端に何かがガザガザと動く物音がして、史美菜はヒツと声を飲み込む。

チューチューと鳴き声がした。

ネズミ？

史美菜はナマのネズミの声を初めて聞いた気がして、一瞬興味を示すが再び固体に指を立てる。

出て来たのはこれまた古い姿見。フレームはロ可可調に似た装飾に彫り込まれて洋風の立て鏡だった。

しかし、本棚の隙間に入っていたのはそれだけ。

「もうひとつは？ 無いよ」

史美菜が振り返ると、夙は再び指をさす。史美菜がよく見るともうは一つ本棚の前に出されていた。

美加が見つけて引っ張りだしたのだろうか。

そんな事はどうでもいいので、史美菜は二つの鏡を魔法陣に置くとするが二つとも脚が付いていない。

史美菜はひとつ息をつく、積み重ねた木箱を二つ引きずり出してそれに鏡を立てかけた。

魔法陣の Teppan に立った自分が鏡にちょうど映り込むように、

鏡の台座や角度を調整する。

準備はこれでいいのだ。

あとは夙を魔法陣の中央に置くだけ。

でも……夙の身には何も起こらずに済むのだろうか。

30・見えるモノと、見えないモノ

「ねえ、あなたには被害はないの？ 大丈夫なの？」

「大丈夫です」

「どうして協力してくれるの？」

「昔の償いです」

夙の顔は白熱球の淡いオレンジ色の光を浴びてもなお、白い頬を光らせていた。

「償い？」

「私も昔、魔法事典を使ってしまいました」

「昔って……？」

まだ高校生なのに、昔って何時よ。

「いえ、私の知り合いにしておきましょう」

「はあ？」

どうにも、いまひとつ不透明で要領を得ない話だ。しかし、夙は続ける。

「その娘は、神社で寝ている魔女に魔法事典を貰ってしまいました。そして、十九歳の時に、その事典を使ったのです」

「何それ？ ていうかそれって……？」

史美菜は不可解な話しに眉を潜める。

「詳しい事はいいです。面倒だし」

「じゃあ、それで何をお願いしたの？」

「お嬢さんです」

「はあ？ でも俗欲はダメだって」

「農家に娘一人では、跡継ぎがいまません。それは切実な問題なのです」

「ああ、なるほど」

夙の堅苦しい敬語に、史美菜はつい頷いた。農家とはそういうものなのだろう。

「だから、願ったのです。その時まだ神社に魔女がいて、何か代償を貰うといました」

「反作用って事ね。それで？」

「今すぐではなく、何時か。魔女はそう言っていなくなりました」

「はあ？ そんなの在りなの？」

「魔女は忙しく、気まぐれなのだそうです。ただ、代償は絶対」

魔法を執行した代償には期限が無く、それは何時訪れるか解らないらしい。それにしても、美加も百夏も即座に反作用が起こり始めたものだ。

「でも……で、代償は？」

「反作用は起こりませんでした。何時まで経っても……私は不安のあまり魔法事典を隠しました。誰にも見つからない場所へ。でも彼女は見つけてしまいました。何度か蔵の片付けや整理するうちに、何時の間にか本棚に並んでしまったようです」

「ねえ、その彼女って美加の事？ 事典を見つけたのは美加でしょ？ じゃあ、あんたは美加のなんなの？」

話しの細部が歪んでいて、どうも理解できない。

史美菜の問いに夙は応えなかった。その代わりに

「急ぎましょ。美加が危険かも知れません」

その言葉で史美菜もとにかく儀式を済ませようと思った。詳しい話は夙から後でいくらでも聞きだせるだろう。

魔法陣の上に立ち、二つの鏡を見つめる。魔法陣の中央には夙がいる。

「ねえ、本当に夙は大丈夫なの？ そんな真ん中に立ってさ」

夙は小さく頷くと「さあ、急いで、あまり時間はありませんよ」

史美菜は開いた事典の呪文を読み上げた。

ティファレント・ラシユタル・ファオフ・アガベレテマ・ヌイト
ハディート・グアス・デリトムス・アウムゲン

ひゅうつと風が鳴った。

さつきまではただ静かに留まっていた空気が一方方向に流れて、史美菜も夙も髪がはためく。

天井の裸電球の明かりがチカチカと細かく点滅して、一瞬の闇と現実が交互に不規則に出たり消えたりする。

史美菜は息を呑んだ。これぞ魔法だ。

暗闇に包まれた瞬間、魔法陣の内側に描かれた六芒星ろくぽうせいが強い光を放った。

暗黒とその輝きに目がくらんで、史美菜は一瞬目を瞑る。それはほんの一瞬の出来事だった。

横から吹いていた風は消え、まるで魔法陣から沸き起こるように下から風が吹き上がる。

一瞬息が出来ないほど巻き起こる突風に、自分の髪の毛が逆立つのが判った。

見開こうとした瞼を、史美菜は再び閉じるしかない。

しかし、それは直ぐにやんで、静寂が蘇える。

史美菜はようやく目を開けることができた。

天井の電球が瞬きを止めると、辺りを通り過ぎていた風もやんでいた。そして風で吹き飛んだのか、小麦粉で描いた魔法陣も消えている。

が……目の前にいたはずの桜木夙の姿も何処にも無かった。

史美菜はモシyakモシyakになった髪の毛に手グシを入れながら、辺りを見回す。

自分以外に人の影はなかった。

風の名残が裸電球を揺らし、床に落ちた自分の黒い影がチラチラと揺れている。

二つの大きな鏡に映る自分が、小麦粉で白くなった顔の自分を他人のように見つめていた。

ボコツと音がして振り返ると、古くなって朽ちた土壁の一部が剥げ落ちて埃っぽい床を汚している。

どこか遠くでカラスが一声、カアと鳴いた気がした。

史美菜はほとんど寝つけないまま月曜日の朝、少し早い時間に学校へ向った。

夙の事が気になったからだ。彼女は何処に行ったのか？

しかし、今までもちよつと目を離れた隙に姿を消した事はあるから、学校へいけば何時も通り彼女がいるのだらうとも思った。

そうやって、史美菜は自分の不安を打ち消した。あの時うやむやになった話しの続きも聞きたい。

教室へ入ると直ぐに夙の机を見る。

何時ごろ来るのか解らないが、そこに夙の姿はいなかった。

まばらに來ているのは、電車時間の関係で早めに登校する連中だった。他にも半分以上はまだ席は空いているのに、何故か彼女の席だけがぽっかりと空洞のように存在する。

「どうしたのフミ。あの席よっぽど気になる？」

史美菜が足を踏み入れた前側の入り口に近い席で、友達と談笑していた瑠衣が声をかけてきた。

「別に、そんな事ないけど」

「だいたい使わない席いつまでも置いてられると確かに気になるよね。ボケた先生は間違つて欠席者を探して名簿をくまなく調べるし」

瑠衣がそう言って笑う。

「ちよ、ちよつとまつて。なんで、あの席が使わない席なの？」

「何言つてんのフミ」

瑠衣の横で談笑していた他の連中も、同時に史美菜に視線を向ける。

「あ……え？」

「だって、転校してくる予定が無くなったんだから、必要ないじゃ

ん」

「転校が無くなったの？」

「フミ……目覚ませ」

瑠衣がそう言って再び笑うと、仲間も笑った。

思わず教室を見渡すと、まばらに來ているクラスメイトがみんな雑談を中断させて史美菜を見ていた。

春に転校予定だった生徒は、何かの都合で取りやめになったそう
だ。だから、机は準備したものの、その席はずっと空きのままし
い。

……だつて……いたじゃん。桜木夙があ席にいたじゃん。

史美菜はクラスメイトに桜木夙の事を聞いて見たが、誰も知る者
はいなかった。

みんな彼女のネタだと思って失笑に留まったのは、幸いかもしれ
ない。

そしてホームルームが始まると担任は

「水曜日から斉野美加が復帰します」

「具合、よくなつたんですか？」

史美菜が訊いた。

「うん。昨日の夜遅く急に元気になって、念のため少し様子を見て
からつて事です」

史美菜はホッと息をついて、もうひとつ先生に質問する。

「あの……モモちゃんは、どうなのでしょう」

他の生徒は、まだ百夏の事故のことを知らない。

「さすが親友？」

担任は史美菜を茶化すように笑うと

「昨日車と接触して怪我をしたみたいだけど、一週間くらいで元気
になるそうよ」

史美菜は今度こそ安堵の息をつく、桜木夙の席をみつめた。

百夏の事故を聞いたクラスの娘たちは、各々に憶測を巡らせて教
室に私語が湧く。

「ああ、それから今日の週番」パンツと担任は出席簿で机を叩くと
「あの机を階段下の倉庫に運んでおいて」

夙の席を指差してそう言つと、朝のホームルームは終わった。

夙の白い残像は消えて無くなった。残像……彼女は残像、それとも幻だったのだろうか？

彼女は何処から来て、どこへ行つたのだろうか。

もしかしたら、あと少し、もう少し一緒にいたなら、友達になれたかもしれない。

カラスが友達のように、ちょっと気味が悪くて無表情で、でも史美菜は彼女の陶器のような白い頬に孤独と裏腹な微かな温もりを感じ始めていたのは確かだった。

桜木夙こそが、今回の魔法の副産物だったのだろうか。

最終話・モノクロ

美加は担任が言った通り、水曜日に学校へ復帰した。

翌週には百夏も学校へ来るようになり、全てが元の鞘に収まった。しかし……美加のせいで自殺してしまった女性はどうなるのだろうか。

失った命は戻らないと言っていた。

ところが、彼女は死亡宣告を受けた直後、実は奇跡的に蘇生していたそうだ。

夙は知っていたのだろうか……どうして、彼女が死んだなんて言っただろう。

時に情報は間違いを犯すのか、史美菜たちを脅えさせる為の演出だったのか。

一度も見舞いに訪れなかった城之内剛彦に、美加は見切りを付けたが、彼は既に他で宜しくやっているようだった。

とにかく、史美菜の周囲は元に戻った。

百夏は捕り付かれていた何かが解けたように、黒髪に戻って腐敗したような男付き合いを絶った。

「やっぱりさ、制服デートとかしたいじゃん」

そう言って、無邪気に笑う。

「そうだよ。学生のうちしか出来ないんだからさ」

史美菜はそう言って笑うだけだ。

健全に同世代の男の子と付き合って、健全に笑う百夏を見たい。

それは、友人としての本音だった。

もちろん、それが汐泊孝樹だったりすればちょっと心が軋むけど。梅雨の気配を感じる合間のある晴れた日。史美菜と百夏は久しぶりに美加の家に遊びに来ていた。

美加の具合が思わしくない間、史美菜が心配して何度か様子を見に来たりしたので、母親がお礼にご馳走してくれるそう。百夏は

その便乗に授かって来た。

玄関を入って長い廊下を歩き、階段の手前で史美菜は足を止める。戸の開いた和室には大きな仏壇があり、菊の花が大輪の群れを成していた。

檜の大きなテーブルの上に写真たてに入った遺影やアルバムが散乱している。

「ああ、なんかお父さんが急に掃除始めてさ。夢におばあちゃんが出て来たんだって」

立ち止まる史美菜に、美加が笑って言う。

「お婆ちゃんって、魔法事典を貰ったお婆ちゃん？」

「なに？ 魔法事典？」

美加はきょとんと史美菜を見つめ、大きな声で笑った。

「なにそれ。フミやばいよ」

振り返ると、百夏も笑っている。

二人の記憶の中に、魔法事典は存在しないのだ。今回の事の起こりとなった、魔法事典は二人の何処にも存在しない。

どういう事なのか解らない。でも、全てが帳消しという事なのだろうか。

あの時、史美菜が手にしていた魔法事典は下からの突風に煽られる様に手の中から消えてしまった。

それに気付いたのは、彼女も家に帰ってからだった。

そして自分以外は魔法事典の事も、桜木凧の事も知らない。

しかし、百夏の家への借金は返済された。あれは、魔法が無くてもうなくなったという事なのだろうか。

とにかく二人は元に戻った。

細かい事はさておき、それで充分だと史美菜は思っている。

もちろん離婚した史美菜の両親は、あの不透明な出来事である魔法とは関係ないからそのままだ。

家に帰る夕暮れや朝起き抜けの淋しい家の風景は何も変わらない。

それはそれで仕方がないのだけれど……

史美菜は何となく和室のテーブルの上を覗き込む。

乾いた畳の匂いと焼香の香りがした。

ふと美加の祖母に興味が戻る。古い神社に間借りしていたであろう草臥くたひれた魔女に魔法事典を貰った女。

「お婆ちゃんて綺麗だった？」

「ああ、昔は綺麗だったよ」

美加は和室に史美菜と百夏を促して、テーブルに置かれたアルバムを開いて見せた。

手前のページには晩年の祖母の姿が、それでもイキキと写っている。

年老いてからずいぶん旅行へ行ったのか、観光地でのカラー写真が多い。その中でもお寺や神社の観光地がやたら多い気がする。

途中からは白黒写真になった。いかにも昭和初期と思われる町並みの背景を背にしている。

お婆さんの姿も、それにしたがってやたらと若々しくなっていてゆく。この中には彼女の人生の全てが詰め込まれているようだった。

時間を逆行して他界した人の人生を見るのは不思議な気分だった。彼女の人生を逆行して眺めている気分だ。

その時、美加がめくるアルバムのページを、史美菜は思わず手で押さえた。

「ちょ、ちよつとまって」

「どうしたの？」

1頁に4枚貼られたうちの一枚の写真を食い入るように見つめる史美菜に、美加が驚いている。

史美菜は顔の位置を変えて、いろいろな角度からその写真を覗いた。

「これ、今のウチらの学校だよ。当時は、南原女学院っていったか

な」

食い入るように写真を見つめる史美菜を覗き込んで美加が言った。そこに映っているのは女学校時代のお婆さんの若かりし日の姿。歳はちょうど十六、七歳だろうか。背景の木造校舎と木枠のガラス窓が時代を感じさせる。

「昔はセーラー服だったんだね」
百夏が覗き込む。

陶器のような白い頬を露に、上品に微笑むモノクロの少女。
眩い白い頬はモノクロの中でハレーションを起こしてぼんやりと輝いて見える。

流れるように綺麗な三本線が衿に入ったセーラー服を纏う凜々しい少女……
着ているものこそ違うが、それは紛れもなく史美菜の知っている少女。

確かに言葉を交わした少女。

桜木凧の姿だった。

桜木凧は美加の亡くなった祖母の若かりし日の姿だったのか。

彼女は魔法を使ってその代償が……もしかしたら時を経て、孫の美加に起こった今回の出来事なのかもしれない。

それを回避する為に彼女はやって来たのだろうか。

そして、神社にいた魔女とは？ 結局凧からそれについて聞き出す事は出来なくなってしまった。

晩年やたらと神社やお寺を旅したという彼女は、もしかして自身再び魔女に会おうとしていたのかもしれない。

史美菜は最近ファンデーションを額に塗らない。あの時、凧と魔法の呪文を執行したときに何故か痣痕が消えたのだ。

顔に着いた小麦粉をはらい落とすと、何か額からスツと抜けた気がした。

家に帰って再び洗顔すると、何も無かったように痣痕は綺麗に無くなっていたのだ。

いくら目を凝らしても、そうすれば見えたとはずの痣痕は綺麗サツパリ消えていた。

魔法陣から出た光が、史美菜の痣痕を消してくれたのだ。もちろん、制服の下にあったお腹の痣痕は今も変わらないが……

このくらいないと、割が合わないじゃん。

今回の事件でひとりあくせくと、回し車に乗ったハムスターのように走り回った史美菜はそれなりに納得している。

結局魔法を使った二人は何も失わず、近場で巻き添えをくった自分は一人で駆けずり回り、拳句の果てに親が離婚した。

もちろん母親がいなくなった事は、除外に価する出来事なのだろうけれど。

二人を助けたのだから、何か負に対する反作用……つまり、自分にプラスの出来事が起きても不思議ではないと思っている。

たぶん……たぶんだけど、夙はあたし自身には何も起こらず、走り回れるのはあたしだけだと知っていたのだ。

だから、最初からあたしに纏わり着いてきたに違いない。ほんとうに魔法にかかっていたのは、あたしなのかも……

「ねえ、美加ってお婆ちゃん子だった？」

アルバムから視線を離れた史美菜が、美加に笑いかける。

「うん。小さい頃はいつもお婆ちゃんにくつついてた」

彼女は嫌いなニンジンもピーマンも、お婆ちゃんの作った料理なら食べる事ができたのだと言う。

「あたしが怪我したカラスを拾ってきた時もさ、お母さんは嫌がってたけどお婆ちゃんと一緒に手当てしてくれたんだ」

「カラス？」

「うん、カラス。真っ黒の。元気になったら礼も言わずに飛んで行

「っちゃったけど」

美加は懐かしそうにそんな事を言うと、史美菜の顔を見て

「どうして？」

「カラスって……そうだったのか。お婆ちゃんと美加を見届けていたんだ。」

「えっ？」

「お婆ちゃんの事」

美加はちよと怪訝に微笑んでいる。

「あ、ああ……フツ、別に」

史美菜は意味深に鼻で笑う「ほら、モモちゃんもよく見ておきなよ。美加のお婆ちゃん」

百夏は不思議そうな顔でアルバムの写真を覗きこむ。

「なんかさ、どこかで見た気がするよ。気のせいだろうけどさ」

「そうだね」

史美菜は小さな声で頷いた。

縁側の開け放たれた大きな戸口から、太陽の香りを乗せた初夏の風が緩やかに吹き込んで桜木夙の上を撫でるように通り過ぎていった。

了

最終話・モノクロ（後書き）

最後までお読み頂き有難う御座います。

当初ファンタジージャンルで投稿したのですが、要素が弱い為に途中で、ジャンル変更してしまいました（苦笑）。
しかも、最終話はちょっと長かったですね……

少しでも覗いてくださった方々に感謝いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2021e/>

不透明な囁き

2010年10月8日12時51分発行